

は　じ　め　に

大分市歴史資料館が昭和62年に開館して三ヵ年が経過しましたが、資料館横に豊後国分駅が新設されたこともあって平成元年5月には10万人目の入館者を迎えることができました。

国分寺の古色ただよう森と、史跡公園の緑の芝生を背景に大寺院の金堂のようにみえる建物はすっかり周囲の環境になじんできたようでもあります。

資料館の一部ともいうべき史跡豊後国分寺跡の整備につきましてはすでに昭和61年度より継続実施してまいりましたが、本年度には寺域の南半部の約1万1,000㎡の整備をおこない、参道ふうの並木や四季の花を楽しめる森と花の広場が完成いたしました。散策や史跡探訪はもちろん、学校の遠足を兼ねての資料館と公園利用が出来るようになりました。

また、恒例の行事として定着してきた特別展では春の「おもちゃの歴史」と秋の「豊後キリシタン史」がともに好評でありましたが、今後ともテーマの選定と内容の充実についてはご期待にそえるようにしたく、また資料の調査と講座の充実など市民のための資料館づくりに努力してまいりたいと存じますので、なお一層のご指導とご叱正をお願いいたします。

平成2年3月31日

館長　佐　藤　興　治

目 次

展 示	1
常設展示 特別展示	
資料調査	6
教育普及活動	20
ふるさとの歴史講座 歴史を映画でみる会	
ジュニア講座 陶芸講座 はた織講座	
刊行物 博物館実習 資料の利用・貸出	
資料収集	24
図 書	26
資料館利用状況	30
管理及び運営	32
歴史資料館協議会 組織・職員	
予算 施設管理業務の内容	
施設の概要	34
条例・規則	36
日 記 抄	40
利用案内	43

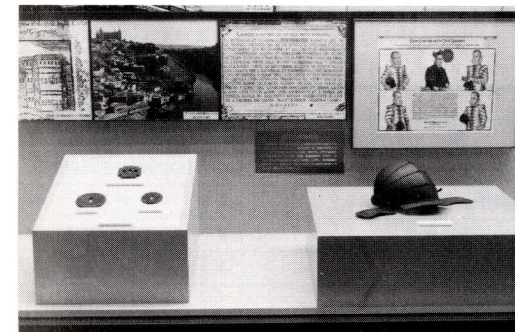
展 示

常設展示

本年度は次の事業を実施した。

- (1)南蛮兜・南蛮つば 3 点の展示
- (2)豊後各藩の藩札 8 点の展示
- (3)嘉永井路絵図の展示
- (4)熊野権現縁起絵巻の展示
- (5)伝大分市京ヶ尾出土銅矛の複製品製作
- (6)豊後国岡田帳の複製品製作
- (7)パソコン学習クイズ新ソフトの製作

本年度は主に中世・近世のコーナーを充実するために実施した。(1)～(4)は当館に寄託を受けた資料である。(1)の兜は鉄板を 5 枚張り合わせ頭前半分をおおう形をしており、前方部につば、両側に耳おおいがつき、西洋甲の趣がある。つばは図柄にクルスをあしらったものであるが、うち 1 点はアルファベットらしき記号が 6 文字金象嵌で彫り込まれており、他にも類例が知られている。(2)～(4)は御城下絵図にかえて近世のコーナーに展示した。(3)は嘉永元年(1848)臼杵藩領宗方村(大分市)の農民が中心となって開いた井路工事の様子を克明に描いており当時の測量・土木技術を知る上で貴重な資料である。(5)は開館時に製作した東京国立



中世のコーナー



近世のコーナー・藩札

示

博物館蔵の銅矛と同系の資料である。(6)は「中世の荘園」コーナーを充実させるために製作した。

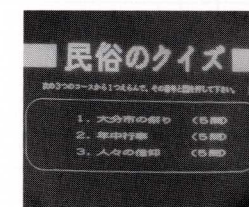
(7)当館のパソコン学習室では、昨年までに「遺跡と遺物のクイズ」、「郷土の歴史クイズ」、「天下統一・歴史のクイズ」の 3 ソフトを作製し、展示および歴史学習の理解をより深める工夫を行ってきた。その甲斐があつてか、利用者の数も依然として多い。その声に応え、学習室が自主学習の場として十二分に活用されるために、今年度も新たにソフトを追加し内容の充実を図ることにした。今回はとくに身近な行事や祭り、また信仰などの歴史や文化を理解・学習できるように、「民俗のクイズ」を作製した。①大分市の祭り ②年中行事 ③人々の信仰の 3 項目からなり、各項目に択一形式の 5 つの問題を用意、全体で 15 の問題を収めている。①では市内の有名な寺社の祭りとそのいわれ、②ではお年玉、節分、端午の節句、七夕、盆踊りの由来や意味、③では墓参り、絵馬奉納、天神信仰、荒神信仰、地藏信仰について問い、解説を加えている。



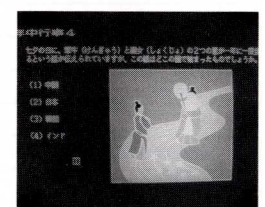
1



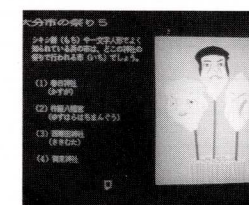
4



2



5



3



6

特別展示

第5回特別展 おもちゃの歴史－明治～現代

おもちゃはいつも子供たちの夢と創造性をはぐくんでくれるものであるが、最近が高価で、最新技術を象徴する多種多様な玩具が氾濫し、おもちゃ本来の意味が問い直されているといえる。

今回の企画は、日本玩具史研究所多田敏捷氏の全面的なご協力で、とくに時代の世相を反映している江戸時代から現代までのおもちゃを一堂に展示し、その歴史を通観するとともに、おもちゃを通して日本近代史に触れられるような構成とした。また、少ないながらも大分の郷土玩具も展示し、期間中5月3・4日には史跡公園交歓の広場で竹トンボ、カン馬、紙ダマ鉄砲など昔懐かしいおもちゃの作り方を子供たちに指導し、親子で遊んでもらった。

会 期：平成元年4月25日(火)～5月28日(日)

会 場：民俗展示室・特別展示室

開館日数：28日

入館者数：9,495人

出品点数：767点



出 品 リ ス ト

江戸時代							
番号	資 料 名	点数	所 蔵 史	番号	資 料 名	点数	所 蔵 史
1	投扇興	1	日本玩具史研究所	9	投 壺	1	日本玩具史研究所
2	貝合せ	1	〃	10	ぶりぶり	1	〃
3	張り子のふくらすずめと振り槌	2	〃	11	はご板とまり	2	〃
4	百人一首	1	〃	12	毛植え人形	3	〃
5	縁日のおもちゃ屋	1	〃	13	和製ルーレット	1	〃
6	八連環	1	〃	14	ねずみのおもちゃ	1	〃
7	盤すごろく	1	〃	15	春遊諸商売繁昌双六	1	〃
8	風流おきな遊び	1	〃	16	戦隊順序図解	1	〃
明治時代							
17	おもちゃ店ミニチュア	1	日本玩具史研究所	33	雲龍水	1	日本玩具史研究所
18	コ マ	6	〃	34	決闘人形	1	〃
19	一つくど	1	〃	35	おもちゃ絵(おばけづくし)	1	〃
20	チンチン電車	1	〃	36	戦艦敷島	1	〃
21	3人のり自動車	1	〃	37	蓄音機	1	〃
22	からくり人形	1	〃	38	ブリキの山車	1	〃
23	しし頭	1	〃	39	七福神(入れ子セット)	1	〃
24	手まり	2	〃	40	西洋少女きせかえ	1	〃
25	きねとうす	2	〃	41	おしゃぶり	2	〃
26	馬車の組立セット	1	〃	42	犬のぬいぐるみ	3	〃

27	汽 車	1	日本玩具史研究所	43	敵艦撃沈セット	1	日本玩具史研究所
28	昭和天皇が遊んだ車	1	〃	44	ギヤ箱入り小物玩具	3	〃
29	絵合わせ	1	〃	45	化粧道具セット	1	〃
30	龍吐水	1	〃	46	教育人力成せる進歩ノ一班図	1	〃
31	有がたき御代の寿双六	1	〃	47	女愛子供あそび	1	〃
32	村井寿語録	1	〃	48	ビー玉	5	〃
大正時代							
49	ままごと台所セット	1	日本玩具史研究所	60	木製自動車	1	日本玩具史研究所
50	ブレリオ式飛行機	1	〃	61	スチームボート	1	〃
51	自動車	1	〃	62	にわとりと少年	1	〃
52	汽 車	1	〃	63	のんきなトウサン人形・豆本	3	〃
53	正ちゃん人形・レコード・豆本	5	〃	64	木地玩具	5	〃
54	焼板の自動車	1	〃	65	台所飾り棚セット	1	〃
55	農村の風景	1	〃	66	手ふうきん	2	〃
56	セルロイド人形	4	〃	67	タンクと欧州戦乱カルタ	2	〃
57	桃太郎折り紙	1	〃	68	ぬの人形	1	〃
58	メリーゴーランド	1	〃	69	買物双六	1	〃
59	のんきなトウサン双六	1	〃				
昭和前期(戦前)							
70	ブランコ人形	1	日本玩具史研究所	78	パイゴマ	1	日本玩具史研究所
71	飛行機	1	〃	79	自動車	1	〃
72	皇族用つまき	1	〃	80	ピエロ人形	1	〃
73	キュービー	1	〃	81	兵隊人形	1	〃
74	兵隊ごっこ用玩具	8	〃	82	代用玩具	1	〃
75	木製三輪車	1	〃	83	サーカスの自動車	1	〃
76	木製タンク	1	〃	84	小唄レビュー抒情双六	1	〃
77	じゃんけん双六	1	〃				
昭和後期(戦後)							
85	十五ゲーム	2	日本玩具史研究所	95	敗戦処理型文化人形	1	日本玩具史研究所
86	空缶ジープ	1	〃	96	進駐軍が乗っているジープ	1	〃
87	セルロイド人形	1	〃	97	電車まわり	1	〃
88	オート三輪	1	〃	98	消防自動車	1	〃
89	クラシックカー	1	〃	99	自動車	1	〃
90	目黒のオートバイ	1	〃	100	フラフープ人形	1	〃
91	ロボット	1	〃	101	パービー人形	1	〃
92	アメリカ車(エドセル)	1	〃	102	しゃぼん玉売り人形	1	〃
93	自転車の少女	1	〃	103	メッサーシュミット	1	〃
94	オーモウレッツ人形	1	〃	104	マンガの泉すごろく	1	〃
キャラクター人形・男の子の子のおもちゃ							
105	エイトマン	1	日本玩具史研究所	112	どろメンコ	4	日本玩具史研究所
106	鉄腕アトム	1	〃	113	なまりメンコ	4	〃
107	鉄人28号	1	〃	114	明治時代のメンコ	7	〃
108	パーマン	1	〃	115	大正時代のメンコ	8	〃
109	トッポジョージョ	1	〃	116	昭和前期のメンコ	10	〃
110	オバケのQ太郎	1	〃	117	昭和後期のメンコ	11	〃
111	狼少年ケン	1	〃	118	オリンピックゲーム	1	〃

119	およげタイ焼くん	1	日本玩具史研究所	146	砂遊びセット	2	日本玩具史研究所
120	ビートルズ	4	〃	147	水あそびセット	1	〃
121	ニャロメ	1	〃	148	福助タイコ	1	〃
122	天才バガボンとパパ	2	〃	149	いなかっぺ大将の時計	1	〃
123	タケチャンマン	1	〃	150	プロマイドあて	4	〃
124	アラレちゃん	1	〃	151	スタージンガーのすごろく	1	〃
125	ウルトラマン	1	〃	152	あてもの	2	〃
126	おそ松くんとイヤミ先生	2	〃	153	紙しばい	2	〃
127	月光化面	1	〃	154	セミカチ	1	〃
128	ダッコちゃん	1	〃	155	ブリキの笛	2	〃
129	ビョンビョン馬	2	〃	156	ハッカパイプ	7	〃
130	ガチャガチャのおもちゃ	1	〃	157	中華三昧パズル	1	〃
131	ヤットデタマンシール	1	〃	158	水ぬりえ	1	〃
132	マジック	1	〃	159	鉄 砲	6	〃
133	十手と刀	3	〃	160	子供の大礼服	1	〃
134	箱もの	2	〃	161	羽子板	2	〃
135	ブリキのバケツ	2	〃	162	セルロイド小物	14	〃
136	キャンディキャンディの絵皿	1	〃	163	モール人形	3	〃
137	おはじき袋	1	〃	164	筆 箱	1	〃
138	子供バック	1	〃	165	ジュニーの化粧セット	1	〃
139	ぬりえ	2	〃	166	パイゴマで遊ぶ錦絵	1	〃
140	あんみつ姫ゲーム	1	〃	167	文化人形	4	〃
141	着せかえセット	1	〃	168	赤ちゃん人形	4	〃
142	スーパーあそびセット	1	〃	169	青い目の人形	4	〃
143	小 箱	1	〃	170	セルロイド人形	4	〃
144	首のせゲーム	1	〃	171	衣裳人形	4	〃
145	セル面	16	〃	172	着せかえ人形	8	〃
大分の郷土玩具							
173	別府のコマ	4	別府市美術館	191	竹田のそでゴマ	1	児玉嘉生氏
174	日田のコマ	8	〃	192	朝見のうなりタコ	1	〃
175	国東ひらコマ	1	〃	193	豊後高田のタコ各種	5	〃
176	胴輪コマ（宇佐）	1	〃	194	前やっこ・後やっこタコ	2	臼杵市中央公民館
177	羽子板	1	国東町歴史民俗資料館	195	やっこタコ他臼杵のタコ	6	臼杵市立臼杵図書館
178	タコ	4	〃	196	中津地方のタコ各種	4	八木山治氏
179	剣さし	3	〃	197	祇園山鉾ミニチュア	1	〃
180	バイコマ	5	〃	198	豊後高田のタコ各種	6	藤原靖彦氏
181	メンコ	140	〃	199	佐伯のぶんぶんタコ	6	汐月正視氏
182	羽子板	1	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	200	緒方のうなりタコ	10	渡辺 工氏
183	竹 馬	1	〃	201	追っかけダルマ	1	〃
184	ゴム銃	1	〃	202	雨乞龍	1	〃
185	コマ・コマひも	18	〃	203	竹田のうなりゴマ	20	波多野晃郎氏
186	メンコ	5	〃	204	宇目のコマ	19	谷口喜三郎氏
187	姫だるま	3	後藤明子氏	205	コマづくり道具	14	〃
188	天ヶ瀬のきじ車	8	河津修吉氏	206	コマ製作工程一式	30	〃
189	きじ車	7	〃	207	素焼き彩色人形	5	藤野武夫氏
190	蒲江のおて玉・おはじき	10	飛高勝則氏	208	大分の民芸品	70	大分市歴史資料館

第6回特別展 豊後キリシタン史 ― ヨーロッパ文化との出会い

1543年ポルトガル人の種子島漂着以来、多くの西洋人が商人や宣教師として日本を訪れ、キリスト教をはじめとする西洋の文化や世界の珍しい品々を伝えた。九州、特に豊後は南蛮貿易の拠点として、その影響を直接にうけ、かつてない国際色豊かな時代が訪れることになる。今回は、その交流のあとを現在に伝える南蛮およびキリシタン資料から再現し、あわせて当時の日本の世相を描く企画である。

会 期：平成元年10月24日(火)～11月26日(日)

会 場：特別展示室・民俗展示室

開館日数：28日

入館者数：7,069人

出品点数：46点



出品目録

件 名	所 蔵	件 名	所 蔵
(重文) 真 鍮 踏 絵	東京国立博物館	伝加藤清正所用南蛮上衣	本 妙 寺
南 蛮 屏 風	神戸市立博物館	メ ダ イ (複製)	天草切支丹館
扇面・都の南蛮寺 (複製)	神戸市立博物館	ミ サ 用 祭 具	天草切支丹館
教会暦祝日図絵 (銅版画)	神戸市立博物館	天 草 更 紗	天草切支丹館
テイセラ日本図 (1595年刊)	神戸市立博物館	火 縄 続 (複製)	野津キリシタン記念資料館
地 球 儀	神戸市立博物館	聖 母 マ リ ア 像 (木造)	野津キリシタン記念資料館
南 蛮 人 蒔 絵 硯 箱	南 蛮 文 化 館	隠 し 十 字 の 壺	野津キリシタン記念資料館
うんすんカルタ蒔絵鼓胴	南 蛮 文 化 館	踏 絵 の 通 達 書	野津キリシタン記念資料館
オルテリウスインド東アジア図	南 蛮 文 化 館	は さ み	野津キリシタン記念資料館
修道士読書図	南 蛮 文 化 館	ナ イ フ	野津キリシタン記念資料館
南 蛮 人 図 小 襖	南 蛮 文 化 館	南 蛮 鐺	野津キリシタン記念資料館
チャビー著「グレゴリオ13世伝」(1596年刊)	南 蛮 文 化 館	キ リ シ タ ン 制 札	野津キリシタン記念資料館
十字刻印ぶどう酒瓶	南 蛮 文 化 館	大分郡葛木村切死丹親類書	長 崎 県 立 図 書 館
南 蛮 船 図 鐺	南 蛮 文 化 館	F R C O朱印入り大友宗麟書状	萱 島 隆 雄
十 字 紋 俵 型 鉢	南 蛮 文 化 館	南 蛮 鐺	大 分 県 立 芸 術 会 館
蒔 模 様 象 嵌 十 字 架	南 蛮 文 化 館	サ ン タ ・ マ リ ア 号 模 型	大 分 市 文 化 会 館 蔵
フランシスコ合字紋入輪違文蒔絵鞍	京都大学文学部博物館	中 世 西 洋 楽 器	葦
豊臣秀吉パテレン追放令 (複製)	財団法人 松浦史料博物館	リ ー フ デ 号 模 型	臼 杵 市 役 所 蔵
踏 絵 の 模 写 図 (絵版之図)	財団法人 松浦史料博物館	引見する教皇グレゴリ13世 (写真複製)	大 分 市 役 所

資 料 調 査

大友氏関係資料

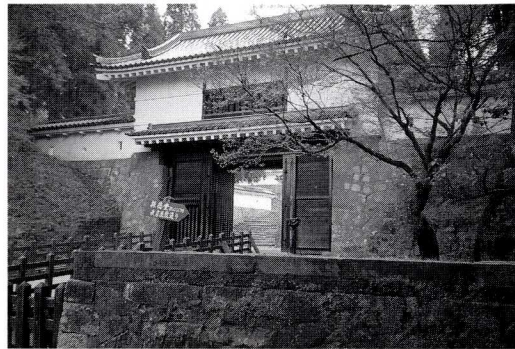
(1) 日南市・飢肥城歴史資料館

本年度の大友氏関係資料調査の1つとして、日向飢肥藩伊東家に伝わる史・資料の調査を行なった。今回の調査では、飢肥城歴史資料館収蔵の天正6年(1578)日向高城合戦における大友・島津両軍の布陣を描いた「六郷荘印高城陣構図」、それに大友宗麟から伊東家の武将山田匡徳(宗昌)が拝領したと伝える甲冑等を写真資料として収めることができた。

「六郷荘印高城陣構図」は、縦81cm×横110cmの和紙上に、高城および周辺の地形を緑・黄・青・赤・黒などの彩色を以て鳥瞰的に描き、そこに両軍の陣構や主な武将の名前、さらに地名や戦の簡単な内容が付記された絵図である。図面の端には「六郷荘蔵」の朱印が押されており、幕末の飢肥藩家老平部嶺南(自らの居宅を「六郷荘」と呼んだ)が所持した品であったことを示す。彼が儒学者安井息軒(飢肥藩士、藩校振徳堂の助教授や昌平黉教授を勤める、特に考証にすぐれ、軍学にも長けた)の高弟であったこと、図中に記された「古へ合戦ノ牛ハ、此所ヲ往還筋ト云」の文面にその学問の影響がみられること、また自らの足跡を綴った日記「六郷荘日記」内でも同じ朱印を使用していることから(『六郷荘日記』青潮社 解題参照)、その製作にあっては嶺南自身が深く関わっていたと推察される。なお図中の陣構、地名、戦況の記述等は、「高城興亡記」(飢肥城歴史資料館所蔵)の内容と類似し、作図の際の参考にされたと思われる。また同館には、同じ高城での秀吉の島津征伐の陣構を描いた「六郷荘印豊臣勢十萬余圍高城図」も所蔵されている。

山田匡徳拝領と伝える甲冑は、部分的に補修がみられるものの、鎧部分は当初のすがたを良くとどめ、「山田匡徳軍功記」(飢肥城歴史資料館所蔵)によれば、匡徳の度重なる手柄に対して「吾レ持シ秘蔵スル処ノ鎧十領有之、此中ニテ目利次第ニ一領可下賜」として宗麟が与えたものと記されている。黒糸、白糸、緋糸の3色で威した胴丸は、室町中期から後期に流行した「色々威」といわれるもので、その点から言えば、伝承および記述の内容と時期的には一致する。

また軍功記には、大友宗麟書状1通および義統書状3通(8ページに掲載)が所収されている(その正文は宮崎県立総合博物館所蔵の「山田文書」内に現存。『宮崎県史』資料編中世1所収)。すべてが年未詳のものであるが、①の義統書状は、軍功記のなかで、天正5年(1577)の伊東義祐一向の日向落ちに従った匡徳が初めて豊後で功をなした内容を記すものとして位置づけられ、以下彼の事績に従って②・③の義統感状、



飢肥城大手門

④の宗滴(宗麟)書状の順で収められている。『宮崎県史』資料編・中世1の末尾にある花押集には、①・③・④文書の花押が載せられているが、福川一徳氏の研究(「戦国期の大友氏の花押・印章編年考」『古文書研究』第31号)によれば、①の義統書状に押された花押は、天正6年の高城・耳川合戦の敗戦後に使用されたもので、特に天正8年正月から9年7月にかけて認められる型、③は天正3年5月から天正7年4月までに使用された花押、④は宗麟晩年使用のもので、天正14年6月から天正15年3月にかけてみられ、「宗滴」の署名と共に用いられたと、述べられている。この分類に従えば、③→①→④の順に文書が出されたことになる。②については「日向表行」の文言から天正6年のものと推定され、同6年の「石城」合戦の内容を記した③の義統感状との関係からして、この4通の文書は、②→③→①→④の順に発給されたものといえる。匡徳が没して約1世紀後の宝永7年(1710)に記された軍功記は、実際の文書に基づいて記述されたものの、以上みたように編年作業に誤りがみられ、また文中にて④の書状を「宗麟公ノ家老宗滴カ状」として宗滴と宗麟を別人に捉えるなど、その内容に多少の誤述があることも否めない事実である。後世編述された文献にあたる際、特に注意を要する点といえる。

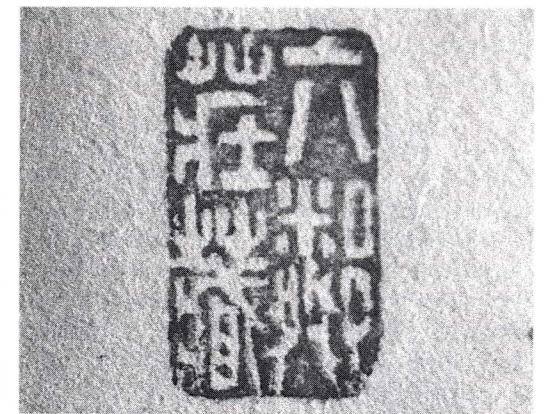
以上簡単ながら内容と若干の所見を述べてみた。当館の大友氏関係の史・資料調査は、ようやくその緒についたばかりだが、こうした地道な調査の積み重ねのなかから、新しい発見をともなった豊かな歴史像が構築されることであろう。(武富雅宣)



六郷荘印高城陣構図



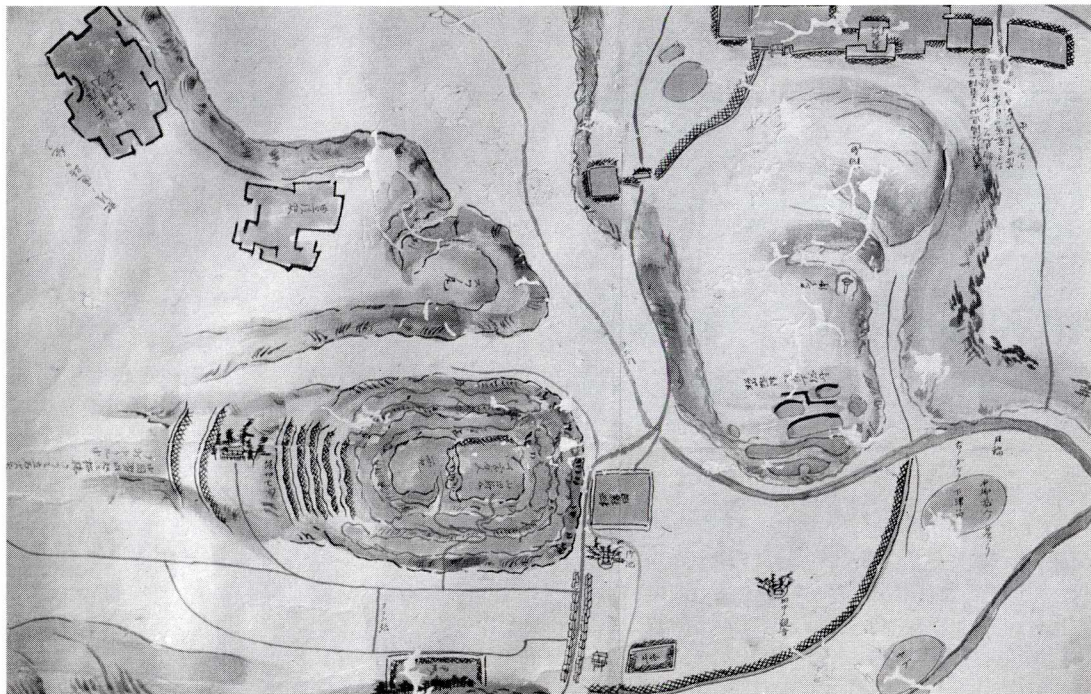
山田匡徳拝領の甲冑



「六郷荘蔵」の朱印



飢肥藩校振徳堂



六郷莊印豊臣勢十万余圍高城図

佐伯惟定以同心、今度其境乱、以来折々軍勞之
段、令承知感心候、殊去十六字目村動之刻、分
捕高名之次第、無比類存候、弥惟定被任申旨可
励馳走事肝要候、必取鎮至義統可遂披露候、猶
重二月廿一日、恐々謹言
山田土佐入道殿
宗滴 花押

④ 大友宗滴（宗麟）書状

前六至石城敵取懸候刻、防戦得勝利候、珍重候
仍其方太刀初之条、被鎚疵矢疵之由、粉骨之次
第忠儀無比類候、弥可被勵馳走事肝要候、必取
鎮一段可賀之候、恐々謹言
山田土佐介殿
義統 花押

③ 大友義統感状

就日州表行馳走由之感入候、弥於勵忠儀者、必
追而可賀之候、恐々謹言
山田次郎三郎殿
義統 花押

② 大友義統感状

球磨郡衆并彼境目諸侍至其方内意之旨具承知候
誠感心候、銘々以状雖可申候、當時爰元加下知
子細之条、必取鎮可申遣候、毎時義陽申談候
趣可被相達候、至日州衆者義賢可有入魂之条不
及申候、恐々謹言
山田土佐入道殿
義統 花押

① 大友義統書状

(2) 広島大学文学部蔵「蒲池文書」

広島大学文学部国史学研究室蔵の蒲池文書を調査した。県内所在の中世文書の多くは『大分県史料』編集のため調査されているが、県外にある大友関係文書は未調査が多い。これら県外所在文書は大友氏の大名領国研究には不可欠の史料であり、あまり知られていない文書を収集し、今後の大友氏研究の便をはかるため、今回の調査を実施した。

蒲池文書は、筑後国三潯郡蒲池（現柳川市）を本拠とした在地領主蒲池氏の相伝文書である。蒲池氏は豊前宇都宮氏一族久憲が応永年間（1394～1427）に同地に居を構えたことに始まると言われる。その後、室町時代末に上・下蒲池の2家に分かれ、下蒲池氏は鎮連の代に龍造寺氏により滅ぼされた。一方、上蒲池氏は大友・龍造寺・島津氏と当地域に勢力を伸ばしてきた大名に従っていたが、天正15年（1587）豊臣秀吉の九州平定の際、豊臣方に降伏し、三池郡内200石を宛行われ、その後筑前の黒田氏に仕えたと言う。文書はこの上蒲池氏に相伝されたものである。

広島大学所蔵の文書は46点で、ほかに「安政七申歳蒲池蔵書」の奥書をもつ蒲池氏の由緒と応永年間から天正15年までの事歴を記した「蒲池物語」1冊が添えられている。文書は表1（次頁、番号は広島大学の整理番号によった）のとおりで、一番古い文書は花押から判断して天文19年（1550）と考えられる2の閏5月26日付け大友義鎮書状であろう。中世文書の差出者の内訳をみると、大友義鎮（宗麟）・義統と年寄衆など大友氏関係が26点と最も多く、大友氏との結びつきの深さを物語っている。しかし、島津氏関係6点、龍造寺氏関係4点もあり、戦国時代末期の筑後をめぐる各大名の動きを見事に反映している。宛所は官途名が多く個人名を比定しにくい、が、「蒲池物語」によれば、勘解由長官・兵庫頭は鎮連のことである。その父鑑広は志摩守・兵部少輔でそれ以前の官途が判明せず、十郎勘解由使が誰にあたるとはわからないものの、年代的には鑑広・鎮連の父子2代にわたっていると考えて間違いなさそう。なお、実名の鑑・鎮の一字はそれぞれ義鑑・義鎮からもらったと思われ、大友氏との関係の密接さをここでもうかがうことができる。

さて、蒲池文書は他にも広島市立中央図書館に23点（以下、広図と略す）、九州大学文学部国史学研究室に3点が所蔵されている（表2・3）。広図蔵は一旦蒲池氏より浅野氏に譲られ、その後浅野長武氏から寄贈された文書である。また、昭和10年刊の『福岡県史料』第五輯（以下『福岡』と略す）に51点、昭和41年刊の『熊本県史料中世編』第五輯（以下『熊本』と略す）にも23点が収録されており、竹内理三氏の「筑前の古文書」（『九州文化史研究所紀要』5号。昭和31

年）には東京大学史料編纂所の影写本をもとに明治20年蒲池久敬氏蔵として48点の文書目録が掲載されている（以下『目録』と略す）。これら原文書と刊行分との関係を述べてみたい。まず、『熊本』は『福岡』『目録』と全く重複せず、広大・広図・九大各蔵の原文書にも一致するものがない。『熊本』の文書解題は広島大学所蔵としているが誤りである。宛所は上蒲池鑑広・鎮連の2代にわたり、元は広大蔵と一具であったと思われるが、江戸時代初めに分家し、肥後細川藩に仕えた家に伝えられた文書と考えられる。『熊本』の本文では「広島市南千田町1150 蒲池玄蔵氏所蔵」と注記されており、現在は子息の玄三郎氏に替わっているが、広島市にお住まいである。玄三郎氏によれば原文書は熊本での戦災で焼失し、東大史料編纂所に昭和12年調査された影写本が残っているだけである。なお、編纂所が調査のため文書を借用した際の目録では近世文書・系図を含め36点が採録されている。

次に今回の調査の主眼である広大蔵の蒲池文書と広図蔵・九大蔵・『福岡』・『目録』との関係を表1・2・3によりみてみよう。備考欄の○印は『福岡』に収録、△印は『目録』に採録されている文書である。広大蔵のほとんどと九大蔵の全ては『目録』に採録されており、明治20年史料編纂所が調査した際には蒲池久敬氏のもとにあった本来は一具の文書である。また、広図蔵は『目録』にはみえないものの、半数近くが『福岡』に収録されており、広大・九大蔵とともに相伝されていたと考えられる。広大蔵で『目録』にみえない文書は24・25の立花忠茂書状、32の某起請文断簡、43・44・45の多久安順書状の6点である。うち、24の立花忠茂書状、32某起請文断簡、43・45多久安順書状の4点は『福岡』にもみられず、新出文書と言える。また、『目録』にはあるものの、17の一要書状、20草野鎮永書状、21戸次鑑連書状、30・31の浦上宗鉄書状、33鍋島信昌書状、41某慶書状の7点は『福岡』に収録されておらず、一般に知られてこなかった文書である。新出分と大友氏関係の文書の内9点の写真を掲載しておく。逆に、『福岡』『目録』にありながら、原文書が広大・広図、九大いずれにも所蔵されていない文書もある。それをまとめたのが表4である。1・2の大友宗麟書状は史料編纂所の調査でもれ、『福岡』編集の際確認されたのであろう。いずれにしる7通とも現段階では所在が不明で、文書が3機関に分かれていった際、散逸してしまったのであろうか。以上、広大・広図・九大各蔵の蒲池文書は明治時代までは福岡県在住の蒲池家に一具として伝えられたが、その後分蔵された。数量的には3機関所蔵の原文書73点のほか、昭和初期まで確認されながら現在は所在不明の文書7点を合わせ、計80点となる。（長田 弘通）

「山田匡徳軍功記」所収の大友氏関係史料

表1 広島大学所蔵蒲池文書

番号	年月日	文書名	宛所	法量 (cm)	備考
1	年欠 5月22日	大友義鎮書状	蒲池十郎	46.0×17.6	○△
2	年欠 5月26日	大友義鎮書状	蒲池十郎	39.4×16.8	○△
3	年欠 8月20日	大友義鎮書状	蒲池十郎	45.8×19.1	○△
4	年欠 5月26日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	45.0×13.6	○△
5	年欠 5月29日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	47.1×12.8	○△
6	年欠 8月24日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	45.9×12.9	○△
7	年欠 6月16日	大友義統書状	蒲池兵庫頭	35.6×11.9	○△
8	年欠 11月3日	大友義統書状	蒲池兵庫頭	45.0×11.4	○△
9	年欠 10月6日	大友義統書状	蒲池兵庫頭	51.7×12.6	○△
10	年欠 5月17日	大友義統書状	蒲池兵庫頭	44.4×12.3	○△
11	年欠 9月8日	大友義統書状	蒲池兵庫頭	41.2×12.4	○△
12	年欠 2月28日	伊集院忠棟書状	蒲池勘解由長官	43.0×13.7	○△
13	年欠 3月24日	伊集院忠棟書状	蒲池勘解由長官	41.7×14.8	○△
14	年欠 卯月14日	伊集院忠棟書状	蒲池勘解由長官	44.7×16.3	○△
15	天正9年12月13日	龍造寺隆信名字状	蒲池吉千代丸	43.0×20.7	○△
16	年欠 6月21日	朽網宗歴書状	(蒲池) 鑑広	88.2×11.2	○△
17	年欠 10月4日	一要書状	(蒲池) 鎮運	26.6×9.7	△
18	年欠 12月13日	田原紹忍書状	蒲池勘解由使	43.0×15.6	○△
19	年欠 正月9日	田原紹忍・親盛連署状	蒲池鎮運	41.0×12.7	○△
20	年欠 12月18日	草野鎮永書状	広公	38.6×13.7	△
21	年欠 3月19日	戸次鑑連書状	(蒲池) 鑑廣	36.3×16.0	△
22	年欠 7月25日	戸次道雪他2名連署状	蒲池	48.7×16.9	○△
23	年欠 8月22日	(島津?) 久将書状	蒲池勘解由長官	39.1×24.5	○△
24	年欠 8月15日	立花忠茂書状	蒲池十郎右衛門尉	51.8×17.5	
25	寛永10年卯月18日	立花忠茂書状	蒲池弥兵太	39.6×17.6	○
26	年欠 10月8日	大友氏年寄衆連署状	蒲池十郎	69.0×16.9	○△
27	年欠 12月18日	田原紹忍書状	蒲池勘解由使	42.9×16.6	○△
28	年欠 卯月7日	島津忠平(義弘)書状	蒲池勘解由長官	40.2×20.2	○△
29	年欠 12月26日	島津忠平(義弘)書状	蒲池勘解由長官	46.4×16.5	○△
30	年欠 2月28日	浦上宗鉄書状	蒲池勘解由長官	43.8×16.4	△
31	年欠 9月23日	浦上宗鉄書状	(蒲池) 鑑広	44.7×11.3	△
32	年月日未詳	某起請文断簡	なし	37.0×16.1	
33	年欠 5月3日	鍋島信昌書状	(蒲池) 鎮運	39.1×15.3	△
34	年欠 菊月19日	伊集院忠棟書状	蒲池鎮運	46.8×12.2	○△
35	年欠 2月16日	朽網宗歴書状	蒲池兵庫頭	43.7×11.5	○△
36	年欠 6月5日	朽網宗歴書状	(蒲池) 鎮運	22.4×7.2	○△
37	年欠 7月15日	朽網宗歴書状	(蒲池) 鎮運	20.5×7.1	○△
38	年欠 8月23日	朽網宗歴書状	(蒲池) 鎮運	47.8×12.5	○△
39	年欠 6月12日	戸次道雪書状	(蒲池) 鎮運	27.6×8.3	○△
40	年欠 8月29日	道雪・紹運連署状	ユキ	26.0×8.9	○△
41	年欠 12月3日	某慶書状	蒲池鑑廣	67.3×8.9	△
42	年欠 6月5日	大友氏年寄衆連署状	蒲池十郎	49.4×17.8	○△
43	年欠 霜月10日	多久安順書状	蒲池	81.8×17.7	
44	年欠 2月6日	多久安順書状	蒲池十郎右衛門	48.2×17.9	○
45	年欠 2月7日	多久安順書状	蒲池十郎右衛門	45.0×17.8	
46	年欠 9月15日	朽網宗歴・鎮運連署状	蒲池鎮運	35.2×12.3	○△
47	安永 7年	蒲池物語		21.1×27.4	

注) ○印は『福岡』に収録されている文書
△印は『目録』に採録されている文書

表2 広島市立中央図書館蔵の蒲池文書

番号	年月日	文書名	宛所	備考
1	年欠正月17日	豊臣秀吉朱印状	蒲池弥兵太	○
2	年欠7月朔日	浅野長吉(長政)書状	蒲池兵庫助	○
3	年欠12月27日	浅野長吉書状	蒲池兵庫助	○
4	年欠正月18日	浅野長吉書状	蒲池十右衛門	○
5	年欠9月24日	浅野長吉書状	蒲池十右衛門・江島与三衛門	○
6	年欠8月5日	浅野長吉書状	羽柴柳川侍従	○
7	年欠8月5日	浅野長吉書状	高橋主膳正	
8	年欠8月5日	浅野長吉書状	蒲池弥兵太	○
9	年欠正月21日	浅野長吉書状	蒲池兵庫助・同弥兵太	○
10	年欠7月3日	浅野長吉書状	蒲池弥兵太	
11	年欠7月7日	浅野長吉書状	生島宮内少輔	
12	年欠7月28日	浅野長吉書状	山越大膳	
13	年欠9月朔日	浅野六右衛門書状	後欠	
14	年欠7月4日	八島出雲守書状	蒲池弥兵太	
15	年欠11月23日	八島出雲守書状	蒲池弥兵太・同兵庫助	
16	年欠正月20日	八島大学書状	蒲池弥兵太	
17	年欠正月23日	八島久一郎書状		
18	年欠正月晦日	前田越前守書状	蒲池弥兵太	○
19	年欠7月3日	前田越前守書状	蒲池弥兵太	
20	年欠卯月16日	徳川家康書状	浅野長政	
21	明治21月3日	古筆了仲極ノ札	蒲池弥兵太	
22	明治21月4日	古筆了仲極ノ札	蒲池弥兵太	
23	—	徳川家康書状買上ニ付覽		

注) ○印は『福岡』に収録されている文書

表3 九州大学所蔵の蒲池文書

番号	年月日	文書名	宛所	備考
1	年欠9月13日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	○△
2	年欠8月20日	大友義統書状	蒲池兵庫助	○△
3	年欠正月14日	五条鎮定書状	蒲池	○△

注) ○印は『福岡』に収録されている文書
△印は『目録』に採録されている文書

表4 所在不明の蒲池文書

番号	年月日	文書名	宛所	収録
1	年欠3月27日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	『福岡』
2	年欠4月28日	大友宗麟書状	蒲池勘解由使	『福岡』
3	年欠8月28日	大友宗麟書状	蒲池十郎	『目録』
4	年欠10月24日	大友宗麟名字書出	蒲池十郎	『福岡』・『目録』
5	年欠6月24日	大友義統官途状	蒲池兵庫助	『福岡』・『目録』
6	年欠9月26日	大友義統書状	蒲池兵庫助	『福岡』・『目録』
7	天正15年6月25日	豊臣秀吉朱印状	蒲池兵庫助	『福岡』・『目録』

注) 収録の『福岡』は『福岡県史資料』第5巻、『目録』は「筑前の古文書」(『九州文化史研究紀要』5号)採録の文書目録の略



(17) 一要書状



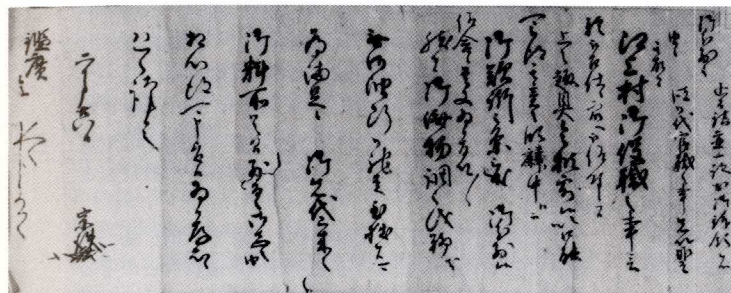
(20) 草野鎮永書状



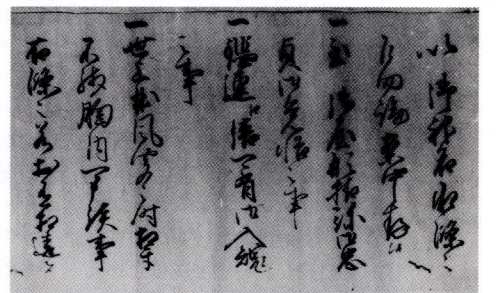
(21) 戸次鑑連書状



(24) 立花忠茂書



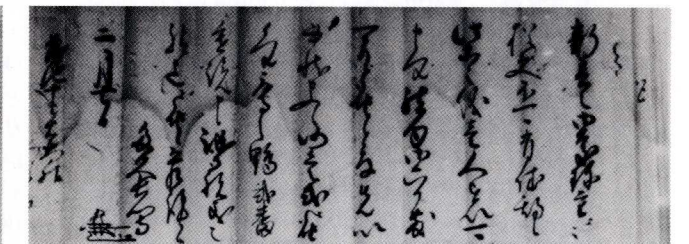
(30) 浦上宗鉄書状



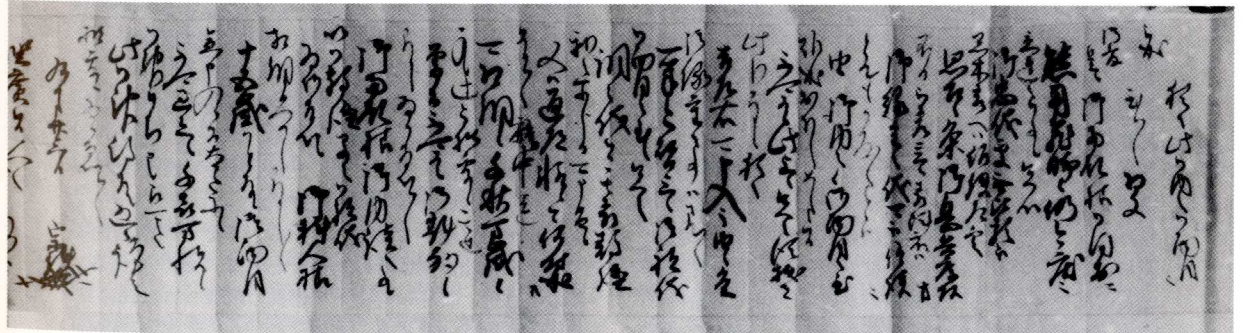
(32) 某起請文断簡



(33) 鍋島信昌書状



(45) 多久安順書状



(43) 浦上宗鉄書状

大分のやきもの調査

今回の調査は、第7回特別展「大分のやきもの―そのルーツをさぐる」(平成2年4月～5月)の開催にあたり事前調査として実施した。大分のやきものといっても原始～近代の長い時代には数多くのやきものが焼造されている。今回は、その中でも近世になって開窯したやきものにスポットをあてることとした。

17世紀の初め、文禄・慶長の役で連れ帰られた朝鮮の陶工によって肥前有田で初めて磁器の焼造が始まると、有田の磁器は伊万里焼きとして急速に全国に流通していき、ヨーロッパなど海外へも多量に輸出されるようになる。このような肥前磁器の隆盛は藩主導の殖産興業の成果とも言え、18世紀後半以降にはこうした殖産興業を目的とした藩窯が九州各地に広がっていった。大分では19世紀に開窯した臼杵藩末広焼、岡藩小宛焼などがある。一方、こういった磁器とともに朝鮮李朝の陶芸技術によって興った茶陶で有名な高取焼、上野焼、薩摩焼などの陶器窯も17世紀に開かれ、大分では、天領日田に高取焼の流れをくむ小鹿田焼が18世紀の初頭に開窯する。

今回の調査目的は、すでに廃窯されその実態が不明瞭である末広焼、小宛焼とともに、今も操業をつづけている小鹿田焼について、伝世品、発掘資料(遺物)、文献資料等から、これらのやきもののルーツを具体的にさぐり、地方的な技術の形成、諸窯間の技術交流の状況を把握し、特別展開催にあたっての基本資料を作成することである。

① 末広焼 『温故年表録』や『古史捷』よれば開窯は享和元年(1801)、廃窯は文化12年(1815)ころと考えられ、わずか15年の操業である。開窯に際しては、享和2年に島原三重町(現島原市三会町)、筑前小石原村、延岡小峰町の3ヶ所4家族9名が臼杵藩に招かれている。したがって、末広焼の製品や窯業技術は、文献的には上記3地域の影響が容易に想定できるが、さて実際にはどうであろうか。

末広窯跡は臼杵市大字末広字寺原の山林に位置し、古くから知られていたが、昭和58、59年に臼杵市教育委員会が行なった発掘調査により、窯の構造、規模、製品の種類、窯道具などの状況が明らかとなった。まず製品についてみると、染付碗、蓋、皿、白磁皿、青磁盤などの磁器群と陶製の碗、蓋、皿、壺、水指、すり鉢、こね鉢、植木鉢などの陶器群があり、短期間の操業ではあるが上物から雑器にいたるまで実に豊富な内容となっている。製品の特徴は、磁器では天草石を使用したと思われる純白の白磁、染付、上物の青磁群とともにやや質が落ちる染付群がある。染付文様には竹文、笹文、松文、花卉文(花牡丹か)、梅樹文、花蝶文、風景文、文字書きなど多種多様であるが、単純

な竹文、笹文を描くものが比較的多い。また、皿の裏文様には便化した唐草文を多用している。陶器では鉄分の多い陶胎に灰釉(ワラ灰釉か)、透明釉を掛け、暗灰青色の碗(一部に笹文を描き陶胎染付風に仕上げたものがある)、皿が多く末広焼陶器群の大半を占めている。さらに、注目されるのは九州地方に系譜をたどれない灰釉、褐釉系統の釉を掛けた関西系の鉢や急須(採集品)が存在していることである。

次に、窯構造と窯道具を見てみよう。窯は、胴木間(燃焼室)と5室の焼成室からなる。各焼成室は階段状に上昇し、胴木間と第5室床面との比高差は約2.9m、窯跡傾斜角度約12度、全長17.45mである。各室は横長形で、第1室は奥行約2.05m、幅約3.0～3.15m、第5室で奥行約3.40m、幅約5.15m～5.40mあり、平面扇形の連房式登窯である。窯の構築は、奥壁にトンバイ(耐火粘土をレンガ状に固めたもの)、側壁に粘土を使用する方法である。窯道具は、全て陶製のものでI字形やT字形のトチン、円盤(楕円)状のハマ、逆台形のハマ、チャツ、サヤ鉢(?)、十字形のタコハマ、足付きハマ、輪状焼台(a―輪形タイプと、b―輪の一方に抉り込みを入れるタイプの2種)等がある。その中で、すり鉢等に多用される輪状焼台は、関西系の窯道具であり、その製品の存在を含め注目される。

さて、年代について文献にみえる記事は前に述べたが、ここでは近年における肥前地域の磁器などの考古学的な研究成果と対応させ、その整合性について見てみよう。磁器の最大の特徴は、18世紀後半に中心をおく染付の丸形碗及び1780年代に出現する広東形碗と18世紀後半～1810年頃に見られる筒形と丸形の湯飲碗などは共伴するが、1820年代に出現する端反形碗を伴わないことである。このことからすると、末広焼は18世紀末～19世紀初頭ころとなる。肥前地域の窯道具は、当初トチンとハマがほとんどであったが17世紀中頃～18世紀にはサヤ鉢や逆台形のハマ、チャツ、シノ等があらわれ、皿、鉢、そば猪口などの底部を蛇ノ目凹形高台に作り、高台内にチャツ、ハマをあてて窯詰めする方法が始まり普及する。そして、18世紀の前半～中頃には関西などの陶器焼成のなかから肥前に伝わった足付きハマ(碗、鉢などを重ね積み焼成するときに製品の間に置く道具)も一般化する。さらに、18世紀の後半以降には長大化した窯の上部空間を利用するための天秤積みといった窯詰め法が始まり、大型のトチン、タコハマが出現するとされている。したがって窯道具では、18世紀後半以降の組合せとすることができる。このように、製品の特徴や窯道具の構成では記録に見る年代とほぼ合致することになる。ただ、奥壁の構築材としてトンバイを使用することは、肥前では17世紀

の後半に始まるが、18世紀後半には奥壁のみならず窯壁全体に用いられるようになり、この点では、肥前地域とややズレを生じている。

それでは、いよいよ陶工出身地である3地域との関係について見ることにしよう。まず、延岡小峰町陶工勝弥、その女房、娘せいの記録については、窯跡の採集品のなかに「文化二年九月吉日、日州延岡、勝弥」銘の鶴首の瓶があり、勝弥の存在は確認できる。現延岡市小峰6428番地の南東に突き出た小丘陵の斜面に1基の窯跡が存在する。この窯から生産された製品は小峰焼として知られており、昭和38年鈴木重治氏らによって発掘調査が行なわれている。この小峰窯も磁器と陶器を焼造する窯で、製品には、鉢、碗、水指、皿、甕、すり鉢、壺、香炉、德利、猪口、急須(採集品)、土管などがあり、この内磁器の染付碗、皿(中皿、小皿)、鉢が特に多く陶胎の染付も若干量存在する。また、関西系の陶器も焼造している。染付文様は、梅樹文、二重網目文、丸文、松文、宝文、竹文、笹文、草花文などがあり、梅樹文を主体としている。磁器の全体的な様式は、肥前それも波佐見地域を含む長崎地方の影響を強く受けており、小峰焼の開窯に際しては、長崎の陶工が強く関係しているものと考えられる。また末広焼との関係で見ると、竹文や笹文、花牡丹文、松文、皿の裏文様である唐草文、碗の凹文などきわめて強い関連性が認められる。年代的には、18世紀後半を中心とする二重網目文や梅樹文を描く肥前系丸形碗、筒形碗を主体とし、末広焼に見られた広東形碗は出土していないことから、小峰窯は18世紀後半を下限とすることができる。このことは、もし勝弥が小峰焼の陶工の一人とすれば、廃窯後臼杵藩に招かれたとみても不思議はない。その他、肥前系窯道具と関西系の輪状焼台の組合せや関西系製品の存在、奥壁にトンバイを使用する窯の構築法、扇形の平面プランが相似形であることなども大きな類似点とすることが可能であろう。しかしながら、末広焼の上物である純白の白磁や青磁さらには陶器の主体を占める碗や皿等の製品はどうもこの小峰窯の影響とは言えないようである。また、筑前小石原の窯業地域でも18世紀後半以降磁器を焼造していないようであり、上物の磁器については残る島原三重町の陶工金助その子松蔵と伊右衛門その女房等の手による製品となる。陶工伊右衛門の墓は現存しており、記録の確かさを裏づけるものであるが、しかし残念ながら、島原地方では窯の存在を含め窯業の実態が不明であり現段階ではなんとも言えない。

次に、陶器であるが筑前小石原村からきた陶工武助同女房の存在が最も可能性が高い。武助について、今回文献での追跡調査はできなかったが、大行事神社境内にある天明6年(1786)太田武作・同武助銘と行者

堂にある文化元年(1804)太田武助・同金吉銘の石塔を確認することができ、臼杵藩にきた武助とはこの太田武助ではないかと意を強くした。陶工武助名は代々世襲されているとのことであり特定するまでにはいたらなかったが、その存在についてはほぼ間違いのないこととすることができる。しかし、武助が臼杵に行く前にあたる18世紀後半頃の小石原焼の実態がいまだにはっきりしておらず直接末広焼陶器との技術的比較を行なうことは無理とのことであった。ただ、17世紀後半から18世紀中頃にかけての小石原・中野焼(上の原、火口谷窯)の製品を実見する機会を得(この中野焼は、後で述べる小鹿田焼開窯頃の状況を知る上で重要であり、詳細については再度取り上げる。)年代的には先行するが、これらの製品のなかに末広焼陶器と共通する技法が数多く存在することが明らかとなった。すなわち、末広焼陶器の特徴である鉄釉地もしくは透明釉地に灰釉や鉄釉を流し掛けた碗や皿が数多く焼造され、丸形の碗や波縁の皿、中・小形の皿など祖形となりえるようなタイプの製品が存在していることである。さらに、輪状焼台もあり注目された。これらのことからみると、やはり末広焼陶器は小石原焼の陶技を受けて成立したものと考えられ、このことは18世紀後半頃の小石原焼の実態が明かとなればより一層ははっきりするであろう。そして、末広焼陶器碗に見る笹文のある陶胎染付などは、おそらく磁器文様を取り入れ新たに創出したものと考えられる。

以上のように、末広焼は陶工出身地の窯業技術や陶技によって成立をみ、さらには肥前地域と密接な関係の中でとらえることができた。また、関西系の製品や窯道具など肥前地域以外の影響も陶器を中心に認められるなど予想していなかった事実も明らかとなった。関西系窯道具については、小石原・中野窯や小峰窯にもあり、両窯からの影響とも考えられるが、輪状焼台こそないが肥前地域でも18世紀前半～中頃には関西から足付きハマが伝わり一般化しており、大きくは、九州各窯で18世紀以降顕著になる関西系陶器技術の影響として今は捉えておきたい。

② 小宛焼 磁器を焼造する岡藩御用窯としてよく知られ、別名寺原焼、鹿山焼とも呼ばれている。それは、大野郡緒方町大字寺原の鹿山神社境内(旧小宛組寺原村塔の本)で焼かれていたからである。しかし、小宛焼に関連する記録は断片的にしかなく、開窯時期や製品についてはほとんどわかっていない。

小宛焼研究については、羽田野長蔵『藩政時代の雑事』(大正11年)、『岡藩時代の雑事』(昭和43年)林勝美『陶遊』(昭和35年)、寺川泰郎「大分のやきもの」(『日本のやきもの集成 九州Ⅱ』昭和63年)等がある。寺川については、羽田野、林の研究によると

ころが大きく、少し長くなるが羽田野、林の研究を紹介し、現状を整理することから始めたい。

まず、羽田野長蔵の『藩政時代の雑事』では

一、陶器製造業

大野川小宛組の内寺原字塔の本現今鹿山神社境内にて製造

一、用土

上品は肥前より取寄せる中品以下は寺原村尾の迫の山中及樋の口並大野郡重岡村字水ヶ谷梓峠辺より取り寄す。

一、焼窯式ヶ所

器械は足車製手車製あり。

一、職工

大棟は肥前長崎の人大神甚五平以下数人を使用せしも地方の人なり。

一、発起人は

小 宛 甲斐喜内
片ヶ瀬 児玉司馬蔵
玉 来 高橋善右衛門

等にして官吏渡辺彦左衛門に請ひ官臣合同の業として事をなせり。

一、現業係

甲斐喜内、児玉司馬蔵、首藤生男、
阿南力三郎

以下下役数名土地の者

一、文久三年創設

一、明治七年廃業

とある。さらに、昭和43年に遺稿集として出版された『岡藩時代の雑事』をみると

岡藩には小宛焼の他に奥岳焼ありしも、奥岳焼については殆ど記録も製品も残り居らざる如し。小宛焼は、文久三年より起こり明治七年に至る間行われたり。

一、設立発端 岡藩生産方奉行（両山奉行をかねる）渡辺彦左衛門、勤王の志士玉来高橋善右衛門、郷中加談役小宛組大庄屋甲斐房之助（後、喜内）及片ヶ瀬組大庄屋児玉司馬蔵（重隆）以上四氏会談会議の結果、半官半民出資を以て、表面は官設と決したる模様なり。

二、創立用掛主任 甲斐房之助、児玉司馬蔵兩名、用掛として首藤松之助（後、生男）及阿南力三郎

三、工場地 小富士寺原地内小字塔の本（現鹿山神社境内）

四、職工棟梁 長崎市、先きの亀山陶器山持主大神甚五平二代亀山と号す。

足車細工人 三人 肥前大村陶器山数箇所より雇入

手車細工人 一人 京都より雇入

絵 師 四人

- 一）総棟梁 大神甚五平（二代）
- 二） 甚五平長子
- 三） 肥前大村の人
- 四） 小富士片毛瀬の者

雑 夫 日雇頭一人 小富士寺山の者

唐臼方兼竈方火夫 二人共に肥前大村の人

五、焼竈 二箇所

内 素焼竈 一ヶ所

本焼竈 一ヶ所

但本焼竈は長さ二間位巾九尺位を大なるものにして、自然細り竈五つ並列す。

六、用石用土

上薬用石は、大部分肥前国五島より輸入。

三斗俵位のもの百五十俵。同小部分は、大野郡重岡村字水ヶ谷梓峠の白石を用ふ。

地石は小富士字尾迫山中より持運ぶ。

土地地主は小富士樋迫にて掘出せり。

絵具石（呉須）は支那品にて長崎より輸入。

七、明治五年迄継続す。同年官設は一切廃業、後は棟梁甚五平引き受けにて事業は同七年頃迄微業にて継けり。

（以上別冊中首藤生男書簡による）

となっており、記述がより詳しくなっていることがわかる。このことは、羽田野も記しているように小宛焼用係であった大野郡小宛上村寺原の首藤生男が羽田野に送った書簡によるところが大きいようである。後述する林勝見の『陶遊』のなかにその原文が記載されているのでみると、開窯年代については明治元年と記憶するとされているが、この点ではあくまでも文久3年であるとする。しかし、廃業については、大正13年段階では明治4年から同年7年に変更しており、首藤生男の書簡内容にそって改められている。

したがって、羽田野によれば小宛焼は、岡藩の生産方奉行渡辺彦左衛門ら4人の会談によって、長崎亀山焼陶工大神甚五平を招き、文久3年（1863）に始まり明治5年に民窯となり、同年7年に廃業に至ったことになる。しかしながら、なにをもって文久3年としたのかは不明である。

次に、林勝見の『陶遊』を見てみよう。陶遊は、昭和12年に脱稿され、昭和33年83才で死去した後、昭和35年に斧石林勝見先生遺稿刊行会で出版されている。現段階では小宛焼を総合的に知る唯一の論考であろう。なかでも、注目されたのは小宛焼の起源についての考察部分であり、これが羽田野と大きく食い違っていることであった。

林は、小宛焼の起源については的確な年代を決める

ことはできないが、①中川久清時代（1653～1666年）、②中川久貞時代（1743～1790）のいずれかの時代に始まったのではないかと推定している。①については久清は備前の池田光政と従兄弟の間柄であり、熊沢蕃山を岡藩に招聘していることから、焼き物もこの頃始められても不思議ではないとする。そして、岡藩土齊田猪介（安永8年～弘化2年・1779～1845）が、藩主より下賜された備前焼風の関羽の像を小宛焼として紹介しその可能性を補強している。すなわち、この関羽の像は、藩主の命によって陶土を備前より取り寄せて小宛で焼かせたもので、明治になって齊田家から豊岡村西光寺に保管を依頼したものらしい。

次に、②の久貞時代であるが、竹田町杣谷の伊藤鏡河（田能村竹田幼少のころの漢文学の師）の日記のなかに、

一、文化八年（1811）二月十八日 曇

小宛の茶碗見物、源助（掘）、伝五郎（水島）同道にて罷越夜五ツ前帰宅手前酒肴持参致さず両君持参

一、文化九年九月八日

八ツ時より緒宛茶碗焼物見物に行く堀源助同道最も留守中故今夕の処織太郎（熊田）へ頼置く暮頃帰宅。参り候間受取

茶碗 五 のぞき鉢 一 平鉢 一 片口 一 土瓶大小 二 跡よりのぞき鉢壱ツ調酒五合、重箱二重、飯、煮、煮染源助せんべい持ちかえる。

一、文化十年九月二十一日 快晴霜朝寒冷昼和暖

今日四ツ頃東厳寺知源。行蔵（田能村）吉田龍吉寛次郎（寛叔二男上島へ養子）家来幸次召連れ綿打（現今の渡内）を通り寺原茶碗焼物見物罷越德利碗調べ罷帰る緒宛桜木の本にて酒給う滑瀬通帰る。

一、文化十一年四月二日 晴

四ツ時より小宛茶碗山へ行きず鉢、葉つき調べ帰る。最も魚釣に枝石川へ行。一向魚食はず故に窓の谷稲荷に参詣いたし滑瀬川渡内魚食はず七ツ時帰る。

などの記事や、また豊岡村三砂谷の安井家文書の中に文政三年（1820）九月二十日 武之助儀小宛組陶器試焼斗方数年引受致神妙に付御目録被成下御目録

一、武百疋 安井武之助正明

天明二年七月二十一日生

の記事がみえることに注目し、小宛焼は文化・文政期には確実に創業している事実から、その開窯のきっかけを、藩主久貞が登用した横山甚助による殊産興業を目的とした藩政改革に求めようとしている。

林のこのような考え方にいたる方法論は、無理なく理解できるのであるが、この藩政改革を第8代久貞の時代とし、また横山甚助についても天明6年（1768）に家禄四百石を給せられたとするなど、現段階の研究からみて矛盾をきたしている。すなわち、横山甚助の藩政改革は藩主久貴（第10代）代の文化4年（1807）に始まるのであり、甚助が四百石に加増されたのは文化5年のことである。

このことからすると、林の言うようにこの甚助の改革により小宛に窯業部門が新設されたと考えるならば文化4年以降が妥当なことになる。（ただ、林の年表には、「文化3年頃、横山甚助小宛にて陶器を焼かしむ」としており、久貞時代とするのは、単なるケアレミスミなのかかもしれない。）

以上が、小宛焼起源についての林の見解である。そして、小宛焼の後半期については、羽田野と同様の考え方（ただ、羽田野は二代甚五平、林は三代としている。）を取っており、年表に、文久3年甚五平小宛焼始むと記している。しかし、その根拠については触れられてなく、首藤生男の書簡や大正11年ころの羽田野による藩政時代の雑事をそのまま引用したものと考えられる。そのなかで、後半期に関連する記録として高橋善右衛門の日記を紹介している。それによると元治元年（1864）に生産方奉行渡辺彦左衛門と陶器一件について相談したことや、阿南力三郎、大神甚五平と会談したことが記されている。林は、その内容が不明であるのは残念ではあるが、これらのことから小宛焼について相互に創設当時の交渉があった事実は明瞭であるとしている。このことから類推すると、元治元年は、文久3年の一年後であることから林は一年ぐらいの準備期間を想定して文久3年頃を後期の開窯と考えたのであろうか。

以上が、林の小宛焼研究の概要である。この研究によると小宛焼を大きく前半期と後半期に分け、前半期については久清時代の可能性を想定しながらも、文化・文政期の記録をもとにその起源について考察している。しかし、この段階における小宛焼の内容は不明とし、また、田能村竹田（1777～1835年）や僧鉄翁（1791～1871年）による長崎亀山焼との交渉があったとする確かな記録はないとする。したがって、小宛焼とする製品に前期小宛焼に属するものが存在するのか、それはどのような焼物か、また上限はいつごろかが今回調査の第1ポイントであり、後半期では亀山焼陶工大神甚五平の存在は明確であるので亀山焼の影響を具体的に調べることが第2のポイントであった。

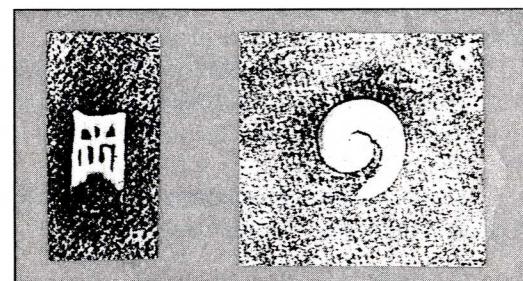
以上のことを念頭におき、調査を実施することにした。以下その概要を述べるが、その前に亀山焼について簡単にふれておく。亀山焼は現在の長崎市伊良林2

丁目に開窯された。文化元年（1804）頃、オランダ人が大量に水瓶を注文したことにより、大神甚五平等4人の陶工が文化4年に（1807）に陶器を焼造したことに始まるとされている。そして、文化11年（1814）には「白焼亀山染付陶器」（白磁染付）を製造した。原料は天草石を用い、呉須は中国からの輸入品を使用した。文政元年（1818）頃より染付で「亀山」と銘を記すようになり、初代甚五平は南京写し染付を主に焼き2代甚五平の時に赤絵も焼造したという。また、天保年間には、中国蘇州の土を用い、土質が粗い鼠色を呈し呉須の色も暗いいわゆる「蘇州手」の染付も生産した。安政6年（1859）には、御用陶器所として再興され、幕府の献上品や奉行の調度品ともされて有名になったが、慶応元年について廃業となった。亀山焼は、山水文様、唐草文様、花卉文様などの染付絵とともに文政4年（1821）にベルシャから長崎に運ばれてきたラクダの絵や捕鯨を反映した鯨の絵など時事を題材にした絵も描かれている。また、田能村竹田や僧鉄翁といった文人達が筆を取った染付も残されている。

それでは、小宛焼の調査について述べていくことにしよう。小宛焼の製品には、伝世品と昭和63年の道路工事に伴って窯跡から採集されたものがある。伝世品については今回は銘のあるものや出所のはっきりしているものを中心に約30点の磁器製品を調査することができた。その大半が染付であり、大型の蓋付壺、端反形大鉢、皿、小杯、端反形蓋付碗、急須、香炉などであった。染付文様は、山水文を描くものが大半であるが、他に鳳凰と龍文、花卉文、人物、鯛文などがあった。銘については、「豊岡製」の裏銘や明治3年の亀山銘をもつものなどがあり、とくに製作年代の明確な製品の存在は注目された。また1点ではあったが陶器を意識したと思われる竹形花瓶に「岡」印が押されていた。これらの製品を大きく大別すると、A乳白色に近い白磁染付（優品が多い）、B青味を帯びた灰色磁の染付（量的に最も多い）、C粗目の陶胎に白化粧による刷毛目を施し、その上に暗い染付、透明釉を掛けるもの（比較的多い）の三群に分類できる。次に窯跡採集品であるが、磁器に比べ陶器の量がきわめて多いことには驚かされた。今まで、実態がまったく不明であったことからすると貴重な発見であった。また多量の窯道具も見つかっている。

窯跡は2基確認できる。首藤生男の書簡によると素焼窯と本焼窯とがあり、本焼窯は5室あり、長さ二間（約3.64m）、幅九尺（約2.97m）とのことであるが未調査のため詳細は不明である。陶磁器片の採集地点は、窯跡部分と窯跡から東へ約5mほどの斜面のくぼみ部であった。このくぼみ部の断面には、多くの陶片焼土塊、窯壁（耐火粘土か）の破片などが堆積している。

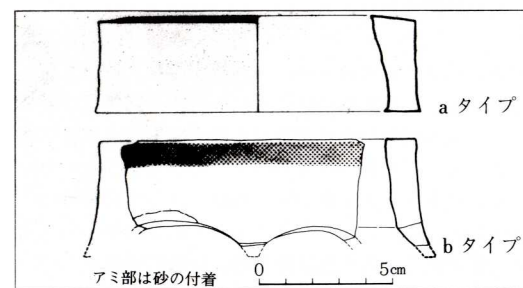
磁器片は10数点あり、染付と白磁、瑠璃釉などであった。染付には青味を帯びた灰色磁の端反形碗（見込を輪状にカキ取るものとそうでないものがある。）、やや深めの湯飲碗（丸碗）、瓶（徳利か）などがあり染付文様は山水文、草花蝶文などが描かれている。陶片は、黒釉、飴釉、褐釉（灰釉）、鉄釉を掛けるもので、すり鉢（大・中型があり、大型には高台をつける。）、甕、壺、碗、鉢、灯明台、急須などの種類がある。そのなかで、すり鉢の内面や高台内に伝世品の竹形花瓶と同範の「岡」印が押されていることが見つかり、花瓶がこの窯で焼かれたものであることが確認できたことは大きな成果であった。また、末広焼に見たように関西系と考えられる急須や鉢が存在していることや黒釉を掛けた鉢（筒形のものか）の底面に上野焼や田香



「岡印」と渦状ヘラ記号

焼に見られるような渦状（右まわり）のヘラ記号が認められるなど、小宛焼陶器の系譜に関連すると思われる資料も検出されている。

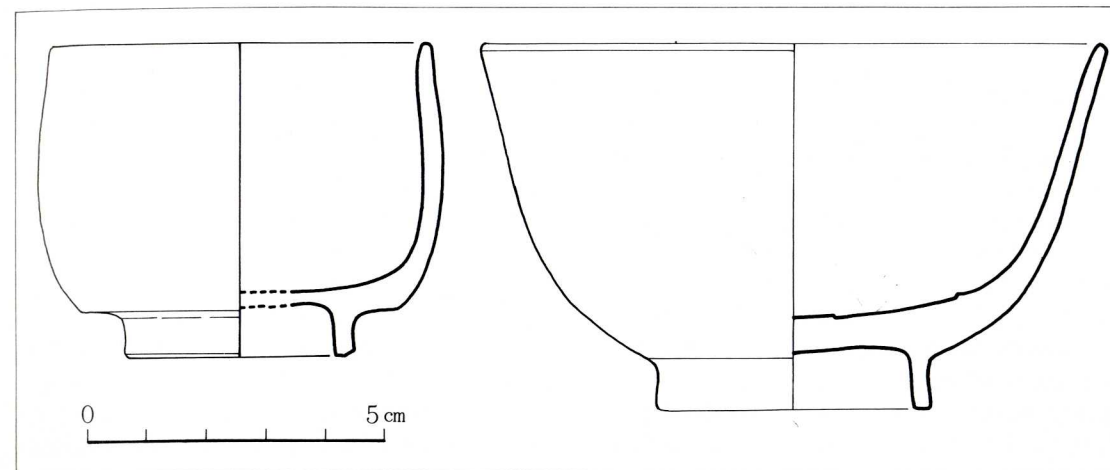
窯道具には、I字形のトチン、十字形のタコハマ、円盤状のハマ（大・中・小）などの肥前系窯道具とともに関西系の輪状焼台（a・bタイプあり）などが採集されており、とくに末広窯には検出されなかった磁



関西系輪状焼台

製のハマも確認された。

それでは、調査の第1ポイントについて見ていくことにしよう。小宛焼の磁器碗は、1820年代以降の特徴である端反形碗と見込みが無文でやや深めの湯飲碗を中心としており、18世紀後半に中心をおく丸形碗及び



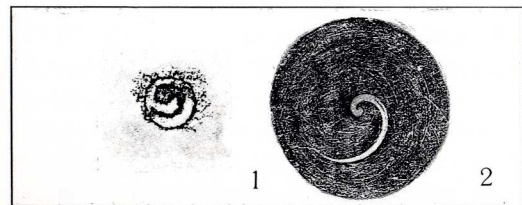
小宛焼草花蝶文湯飲碗と山水文端反形碗

1780年代に出現する広東形碗、18世紀後半～1810年ころに見られる筒形と丸形の湯飲碗などは一点も確認されていない。この点から見ると文化・文政期を上限とする前期小宛焼に属する磁器製品存在の可能性が生まれてくる。とすると、まず林の言う久清時代説はなくなる。しかし、端反形碗と広東形碗は、しだいに端反形碗が主流になっていくとは言え併焼され、幕末までに広東形碗は消えると考えられており、小宛焼製品のなかに広東形碗が確認されていないことは末広焼の状況から見ても不思議なことである。このことについては、①まだ発見されていない。②小宛焼では広東形碗は採用されなかった。③端反形碗などは文化・文政期のものでなく、広東形碗が消えた幕末頃のものである。などが想定されるが現状では③が最も妥当であると思われる。また、その他の製品の特徴についても幕末から明治にかけてのものであり、19世紀前半頃に比定される資料はない。とすれば、文化・文政期に磁器製品は焼造されていないことになり、磁器の生産は後期になって大神甚五平によって始められた可能性が強くなるのである。しかし、19世紀前半～幕末にいた

る陶磁器の編年体系は肥前地域においても確立しておらず、今回の調査において結論づけるまでにはいたらなかった。次に、第2ポイントである亀山焼との関係であるが、結論を先に述べると磁器製品は亀山焼の陶技を強く踏襲しているものと考えられた。すなわち唐草文様の製品は確認されなかったが、①Aの天草石を使用した可能性の高い白磁染付や、Bの青味を帯びた暗灰色磁染付に描かれる山水文、鯛文などの筆風（構図や山、木、建造物などの描き方）に類似性がきわめて多い。②亀山焼で多用している雷文（縦長と横長を組み合わせた連続雷文）が認められる。③Cの粗目の陶胎染付は、天保年間以降に見られる蘇州土亀山を意識した製品と考えられ、大型鉢や皿の形態などにも共通点が認められる、などである。しかし、亀山焼との関連が強いと思われるA・Cに比べ、Bが圧倒的に多いことや、横長の連続雷文を多く使用する点などから、小宛焼と呼べる独自の特徴を持つ製品が完成されたと考えられる。なお、陶器であるが高取、上野焼、さらには関西系などの技術の影響が想定され、文献には現われない複雑な様相を示している。今後、磁器だけ

ではなく陶器についても見なおしていく必要性を強く感じた。

③ 小鹿田焼 日田市源田町皿山にある。開窯については、「福岡藩郡役所記録統風土記付録」に見える小石原陶工柳瀬三右衛門の行跡や小鹿田焼陶工、黒木修宅にある「皿山開基覚書」等の記録から、宝永2年(1705)頃と考えられている。小鹿田焼と言うと飛かんや白化粧による刷毛目技法がよく知られておりこれが小鹿田焼の特徴とされがちであるが、これらの技法は比較的新しく、飛かんは大正末頃、刷毛目は昭和7年以降のものとされている。今回の調査では小鹿田焼のルーツを探ることを目的としたため、近代、現代の製品についてはひとまず保留し、18世紀前半～幕末頃の状態について情報収集をおこなった。ところが以外と江戸時代の実態についてはわかっていないことが明らかとなった。製作年代の明確な伝世品の上限は今のところ19世紀前半であり、開窯期を含めた18世紀の実態はまさにまぼろしと言わざるをえない。まず、19世紀前半の製品には文政2年(1819)の裏銘をもつ茶壺2点(A壺「文政二年、卯四月吉日、豊州日田住、喜藤次造之」、B壺「文政二年、卯五月豊 日田住、代助造之」と天保3年(1832)銘の流掛酒甕がある。2点の茶壺は、製作時期が1ヶ月しか変わらず、この時期の特徴を知る貴重な資料である。器高40cmほどあり、直立して立ち上がる頸部にやや肥厚したL字形口縁をもち、肩は大きく張り、胴上半部に最大径をもつ。A壺には黒鉛釉、B壺は鉛釉が施釉され、肩部に1-3条の平行沈線文がめぐっている。このように2点の壺は全体の形態がきわめて類似し、19世紀前半の特徴とすることができよう。しかし、B壺には、胴部中央に雁文をめぐらしたり、裏銘の最後に渦状のへう記号が施されるなど、A壺にはみられない要素をもっている。こういった文様や記号の存在については、陶工の違いによるものと考えられる。日田在住の桑野陽吉氏の話によれば、A壺の喜藤次なる陶工は柳瀬姓であり、B壺の代助は坂本姓ではないかとのことである。とすれば、同時期に作風の異なる小鹿田焼が存在することになり実に興味深い。また、渦状へう記号は他にも鉛釉地にイチン(ぼんがき)の藤花唐草文を配した輪花皿の裏側に、代助作とは異なるやや間延びした渦状



小鹿田焼にみるへう記号(1.B壺 2.輪花皿)

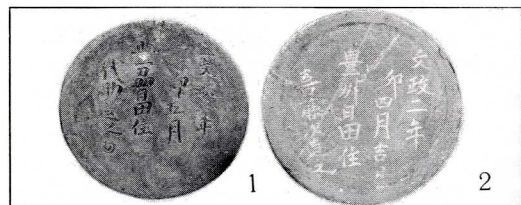
記号が認められ、この記号が例外的に存在するものではないことを示している。このことは、小宛焼陶器にも認められたように上野焼系統の影響を暗示するものとして注目される。

次に、天保3年銘の酒甕であるが、頸部が直立し、肥厚したL字形の口縁にどっしりと安定した胴部もつもので、器高が口縁径に比べやや大きくなっている。釉は、鉛釉地に白と黄色の釉を流し掛けている。

このように、19世紀代の伝世品にしても年代の明確なものはきわめて少なく、製品の型式変化を詳細に追うことはなかなかできない。ただこれらの資料から大まかに、幕末から明治になると壺は最大径が胴部中央に下がり、撫で肩の壺に変化し、甕は長胴化したずんどうタイプのものが多くなるといった傾向がうかがえる。また、流掛けや打掛けに使用する釉には白と黄色釉に加え青釉が新たに現われるようである。

さて、実態の全くわからない開窯期のことについてであるが、寺川泰郎氏の興味深い見解があるので、まずこれを手がかりとした。寺川は、昭和50年に大分県教育委員会が発行した『小鹿田焼の伝統と陶器』のなかの「小鹿田窯の源流」において、小鹿田焼開窯期の製品は、小石原中野焼の影響を強く受けていたものと推定する。すなわち、小石原中野窯は、天和2年(1682)に伊万里の陶工を小石原中野皿山に招き創始したもので、初期の小石原焼は伊万里焼きの影響を受けたが、享保年間(1716~1735)には、天和年間以来の陶技をやめ高取焼にならって焼造するようになったと言う記録をもとに、小鹿田焼を創始した小石原陶工柳瀬三右衛門が小鹿田皿山にいた11年間にちょうどこの時期にあたることから小鹿田焼は初期約10年間は唐津焼の影響を受け、後に高取焼の陶技を受けた民用品を焼くようになり、茶陶も焼造していたのではないかと述べている。

そこで、この寺川の想定を確かめるためにも小石原中野焼の状況を調査する必要性が生じ、小石原村へと足をのばすことにした。小石原村では昭和62年度から小石原焼のルーツを探るための古窯跡の発掘調査と併せて古文書の掘り起こしを始めており、小鹿田焼開窯年代に併行する中野上の原・火口谷窯(1号窯)の膨大な発掘品を実見することができ、まぼろしと化してい



小鹿田焼茶壺の裏銘(1.A壺 2.B壺)

る初期小鹿田焼の実態にせまる大きな手がかりを得ることができた。

寺川も述べているように小石原中野焼は、貝原益軒の「筑前国統風土記」(1706年)に「天和2年より陶工来り住して陶器を作る。肥前伊万里の磁器にならへり」といった記録があるなど、磁器が焼かれていたという文献がいくつかあったが、これまで物証がなかった。ところが、上の原窯の調査によって多量の磁器が出土し、肥前の陶工が来て磁器焼成を行っていたことが考古学的に裏付けられたのである。

小石原村古窯跡調査指導員である佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏や調査員である福岡県教育委員会の児玉真一氏によれば、①上の原窯では多量の陶器とともに染付などの磁器が出土している。磁器製品の文様(藤、梅樹、柴垣、七宝つなぎ)や器形などは17世紀後半に現われる有田周辺の磁器窯のものに類似するもので、中野焼始まりの記録にみる天和2年に合致する内容である。しかし、出土品の内容は、17世紀後半~18世紀前半に流行した刷毛目碗など唐津焼陶器窯に類似する陶器が存在する。肥前の技術や製品と異なる陶器も数多くある。磁器製のハマ、チャツ、サヤなど当時の伊万里の民窯には見られない窯道具が多い。と言った特徴が見られ上の原窯の製品は単に肥前の技術者だけが来たとは限らない。②そのなかで肥前の技術や製品と異なる陶器は、火口谷窯では主製品となっており、なかでも多量に出土しているすり鉢は小石原皿山地区で最も古い可能性が高い一本杉窯に酷似する。その特徴は、肥前窯との関連性は認められず、むしろ寛永7年(1630)に開窯したとされる高取焼白旗山窯(飯塚市)のすり鉢との類似性が強い。このことから小石原皿山地区の窯は、寛文5年(1665)頃に白旗山窯から移転した高取焼陶工によってまず開始されるが、天和2年には肥前の陶工を招き磁器を焼き始めるようになる。③火口谷窯の製品は、上の原窯に比べ高取系の陶器が主流になり、磁器製品が激減する。しかし、陶器皿のいくつかの種類は、17世紀末~18世紀中頃の唐津系陶器に共通するほか、備前焼の保命酒徳利と類似するものなどもあり、各地の意匠や技術を積極的に取り入れている。開窯は上の原窯にやや遅れ、相当期間併窯され、閉窯は18世紀の中頃である。④すなわち、小石原中野焼は、肥前磁器の技術で窯や窯道具など一新されるが、だんだん高取系陶器(茶陶を含む)が中心になっていき、鉄釉地もしくは透明釉地にワラ灰釉

や鉄釉などを流し掛けた碗、皿を多く焼くようになる。それは、18世紀前半~中頃のことである。

以上が、上の原窯、火口谷窯の概要である。この2窯の調査は、はからずも寺川の想定を考古学的に実証することになった。すなわち、柳瀬三右衛門が小鹿田皿山に出向いた時期は、この両窯は創業されており小石原焼と小鹿田焼との関係から見て、当然上の原窯から火口谷窯へ移行する技術や製品の変化は、小鹿田焼の開窯から18世紀中頃にかけての製品に影響を与えたものと考えられる。したがって、初期小鹿田焼の実態が不明な現段階においては、この両窯の製品を念頭においておく必要がある。

以上、近世に開窯した大分を代表する3窯についての調査概要を述べてきた。これらの内、臼杵末広焼については発掘調査がなされており地方的な技術の形成や諸窯間の技術交流の状況がある程度具体的に把握することができた。しかし、他の2窯については未調査のため伝世品や採集品を中心として推量に推量を重ねる結果となった。ぜひとも、計画的な発掘調査が望まれるところである。また、時間の都合で調査出来なかった波越焼(佐伯)、丸山焼(臼杵)、水ヶ谷焼(宇目)等の状況も気になるところであるが今後に期すことにしたい。(玉永光洋)

参考文献

- ①『末広焼』窯跡調査報告書 臼杵市教育委員会 1985
- ②『延岡小峰窯址』郷土文化研究紀要第1輯 郷土文化研究所 1964
- ③ 寺川泰郎「大分のやきもの」『日本のやきもの集成12』 平凡社 1988
- ④『長崎の陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館 1988
- ⑤『小鹿田の伝統と陶技』大分県文化財調査報告書第33輯 大分教育委員会 1975
- ⑥ 大橋康二 a「小石原中野焼」『館報小石原第28号』小石原村公民館 1988
b『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 1989
c「伊万里磁器研究の状況」考古学ジャーナル298 1988
d「肥前陶磁研究の到達点と課題」考古学ジャーナル299 1988
- ⑦ 児玉真一 ⑥のaに同

教育普及活動

ふるさとの歴史講座

歴史、考古、民俗、古文書の4コースがあり、つぎのとおり実施した。

期 間：各コースとも3ヵ月（計9回）

歴史4月～6月、考古7月～9月

民俗10月～12月、古文書1月～3月

日 時：毎月第2・3・4土曜日 14時～15時30分

対 象：高校生以上

定 員：歴史・考古・民俗は70名、古文書のみ40名

受講料：無 料

(1) 歴史のコース

講師の関係上、古代1回、中世4回、近世3回と少し片寄った構成となった。内容は豊後国を対象とし、個別の問題を取り上げるものとした。

実施日と内容

現地講座 高崎山城に登る

高崎山城は太友氏の本城で、西日本随一の連郭式山城

実施日	内 容	講 師
4/8	太友氏と島津氏—島津氏史料を通してみた	長田 弘通（当 館）
15	豊後国分寺の歴史—中世から近世—	武富 雅宣（当 館）
22	由原八幡宮と賀来荘—平経妙申状を読む	長田 弘通
5/13	高崎山城と市内の山城	佐藤 興治（当 館）
20	古代の豊後	西別府 元日氏 （大分大学助教授）
27	現地講座 高崎山城に登る	佐藤 興治
6/10	府内城下町について	豊田 寛三氏 （大分大学教授）
17	豊後の諸産業	長田 弘通
24	豊後の農民闘争	武富 雅宣

のべ受講者数 372人

城であるが、一般には余り知られていない。そこで事前に講義をした上で、実際に登り遺構を見学し、遺跡の重要性を理解してもらうために企画した。



高崎山城跡

(2) 考古のコース

全体テーマを「墓制からみた大分」とし、時代ごとに通史と大分の墓制を交互に講義し、比較しながら理解できるような内容とした。

実施日と内容

現地講座

8月30日 海部地方の古墳めぐり 参加者37人

実施日	内 容	講 師
7/15	旧石器～縄文時代の墓概説	橋 昌信氏 （別府大学教授）
22	大分の縄文時代の墓	坂本 嘉弘氏 （大分県文化課主査）
29	弥生時代の墓概説	玉永 光洋（当 館）
8/12	大分の弥生時代の墓	吉田 寛氏 （大分県文化課主事）
19	大分の古墳時代の墓	村上 久和氏 （大分県文化課主査）
26	古墳時代の墓概説	甲斐 忠彦氏 （県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館学芸課長）
9/9	宇佐地方を中心とした 古代・中世墓	小倉 正五氏 （宇佐市社会教育課主査）
16	文献からみた庶民墓	飯沼 賢治氏 （県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究員）
23	古代～近世の墓	佐藤 興治（当 館）

のべ受講者数 447人

全体テーマに合わせて古墳めぐりとした。海部地方を選んだのは、前方後円墳が多くあり、海を生活基盤にしていた豪族の存在形態を見事に示しているからである。コースはつぎのとおり。

大蔵古墳～王ノ瀬石棺～築山古墳（佐賀関町）～上ノ坊古墳～亀塚古墳



王ノ瀬石棺

(3) 民俗のコース

テーマを「石の文化と信仰」とし、石造物やそれを作った石工、また生み出す基盤となった信仰の面から豊後特有の石の文化を取り上げた。

実施日と内容

実施日	内 容	講 師
10/14	石橋と信仰	田村 卓夫氏 （大分の石橋を守る会代表）
21	大分の石造仁王	渋谷 忠章氏 （大分県文化課係長）
28	石工の歴史について	段上 達雄氏 （県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）
11/11	大分の板碑	渋谷 忠章氏
18	大分の石工について	段上 達雄氏
25	大分の磨崖仏その1	渡辺 文雄氏 （県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員）
12/9	大分の磨崖仏その2	渡辺 文雄氏
16	石の信仰その1	野崎 一郎氏 （大分県教育センター主任研究員）
23	石の信仰その2	野崎 一郎氏

のべ受講者数 411人

(4) 古文書のコース

古文書の解読入門講座で、今年度は中世文書もテキストとして使用した。

実施日と内容

実施日	内 容	講 師
1/20	古文書学入門	長田 弘通（当館）
27	柞原八幡宮文書「国司庁宣案」	武富 雅宣（当館）
2/10	柞原八幡宮文書「国司庁宣案」	長田 弘通
17	大友文書「足利尊氏袖判下文・同御判御教書」	武富 雅宣
24	柞原八幡宮文書「キリシタン覚え」	長田 弘通
3/10	玉置家文書「府内城下町三口門番所についての覚え」	武富 雅宣
17	柳井家文書「口戸村と木上村の村方出入り」	長田 弘通
24	毛利空桑記念館文書「協蘭室著・鶴崎夜話」	武富 雅宣

のべ受講者数 265人

歴史を映画でみる会

16mmフィルムを新たに6本購入し、7月から次のとおり実施した。

日 時：毎月第4日曜日 11時、13時、14時、15時の4回上映

料 金：無 料

実 施 日	上 映 フ ィ ル ム	参加人数
第1回 7/23	日本人はどこからきたか	77人
第2回 8/27	岩宿の発見—日本の石器時代	52人
第3回 9/24	縄文時代	36人
第4回 10/27	南蛮文化伝来と受容 （神戸市立博物館より借用）	51人
第5回 11/26	同 上	36人
第6回 12/23	日本列島と朝鮮半島	12人
第6回 1/21	桂 離宮	85人
第8回 2/25	よみがえる光琳屋敷	22人
第9回 2/25	芭蕉布を織る女たち （ポーラ伝統文化振興財団より借用）	69人

夏休みジュニア講座

体験発掘と土器作りを組み合わせた小中学生対象の体験講座で、次のとおり実施した。

内 容：体験発掘と土器づくり

期 間：Aコース 7月26日～28日、8月4日

Bコース 8月23日～25、31日

時 間：10時～14時

参加者：Aコース 18名（小学2年生～中学2年生）

Bコース 26名（小学3年生～6年生）

日 程：1日目 開講式、体験発掘

Aコース 植田市遺跡

Bコース 下郡遺跡

2日目 午前 映画「おおむかしの生活」鑑賞

資料館見学、ねんどねり

午後 土器づくり

3日目 終日 土器づくり

1週間乾燥

4日目 土器焼き、閉講式



ジュニア講座

陶芸講座

期 間： 2月6・14・20・27日、3月6日
(計5回)

時 間： 13時～16時

講 師： 東 圭子氏

内 容： 花瓶とお湯のみの製作

参加者： 10名

費 用： 材料費実費負担

カルチャーブームを反映してか人気は非常に高く、定員10名のところ51名の応募者があった。しかし、作業室がせまく、先生の指導がいきとどかないことからやむを得ず抽選とした。市民の期待に応えきれないのは大変残念なことであり、資料館協議会でも問題として指摘されている。現状では定員を増加することは無理があるため、今後回数を増やすなどの工夫をしなければならないと考えている。好評であるが故に課題が多く残る講座であった。



はた織講座

陶芸講座に続き入門実技講座として今年度から新しく開講した。内容は次のとおり。

期 間： 3月16・20・23・27・30日 (計5回)

時 間： 10時～12時

講 師： 首藤千代氏

内 容： テーブルクロスの製作

参加者： 10名 (応募者総数71人となり抽選)

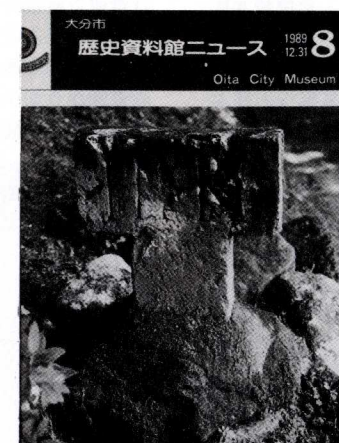
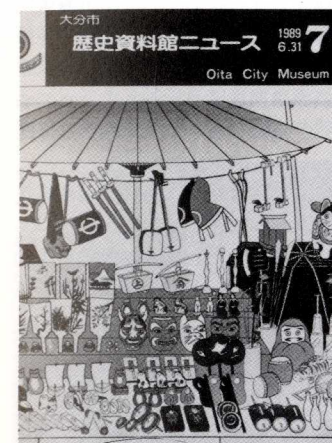
費 用： 材料費実費負担

定員10名のところ71名にのぼる応募があったが、陶芸講座と同様な理由から抽選とせざるを得なかった。織り機は卓上式の簡易なもので、それ程大きな作品は作れないため、毛糸や麻糸を使用し、幅30～40cm、長さ60～70cmのテーブルクロスを製作した。参加者は皆さん女性で、初めての方ばかりであったが、5日間に色鮮やかな作品がそれぞれ2、3点できあがった。



刊行物

名 称	規 格	ページ数	発行部数
歴史資料館ニュース7号	B 5	8	2,500
〃 8号	B 5	8	2,500
〃 9・10号	B 5	12	2,500
大分市歴史資料館年報 1989	B 5	38	1,500
第5回特別展「おもちゃの歴史」図録	B 5	26	1,500
第6回特別展「豊後キリシタン史 — ヨーロッパ文化との出会い」図録	B 5	34	1,500



博物館実習

実習生1名(駒沢大学史学科3年)を受け入れた。
実施日・実習内容は次のとおりである。

実施日	実 施 内 容	担 当
8/5	ガイダンス・館内および史跡公園見学	館長・長田
8/6	図書の分類・整理	三 浦
8/8	写真撮影	長 田
8/9	歴史資料(絵巻・古文書)の取り扱い	武 富
8/10	ジュニア講座土器づくり参加・民俗資料の整理	長 田
8/11	豊後国分寺跡発掘参加	玉 永
8/12	写真焼付け・資料の保存処理	長田・館長
8/13	視聴覚機器の取り扱い	武 富
8/15	資料の実測	玉 永
8/16	実測図のトレース	玉 永

資料の利用・貸出

(1) 資料の利用提供

収蔵資料の利用提供は、研究者の調査・撮影3件、テレビ放送のための撮影・写真貸与2件、学校への写真貸与2件、印刷物掲載8件であった。

(2) 資料の貸出

収蔵資料の貸出は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館「古墳文化の世界」展に上ノ坊古墳環頭太刀他出土遺物、野間3号墳渦状文鏡他出土遺物、守岡遺跡出土遺物計16点。竹田市教育委員会「滝廉太郎」展に自筆楽譜他滝廉太郎遺品10点、大分県農業協同組合中央会「第13回大分県農業祭」に農具15点、大分県消費生活センター「むかしの生活」展に羽釜1点、以上4件であった。

資料収集

寄贈

考古資料

- 下郡遺跡採集弥生時代木製品 弓1、鎌3
以上4点 柴田義弘氏
- 土師器甕2、同高坏2、結晶片岩1
以上5点 佐藤宣充氏

歴史資料

- 法華経8巻 植木和一氏
- 寛永通宝6点 藤野武夫氏
- 延岡藩預切手2、寛永通宝6、康熙通宝1、
乾隆通宝1 以上10点 大分市広聴広報課

民俗資料

- 足踏みミシン1点 中西昌昭氏
- 駄菓子屋のガラス箱2点 新里裕元氏
- 素焼の土人形6、唐津焼き碗1 藤野武夫氏
- 膳20、羽釜2、矢ばさみ1、ジュラルミン製ボール
2、アルミ製鍋1、鎌1、火鉢1、ふくし1、えぶり
1、箱膳5、手桶1、おひつのふた1、竿秤1、
木槌1、碗9、碗のふた10、ミンチ1
以上59点 小野富子氏
- 唐箕1、田の草取り 以上2点 久保雅史氏
- 唐箕1点 幸重昌充氏
- 臼すり機一式、発動機1点 小野 新氏

- 五月飾り一式 堀田富子氏
- 石製七厘1点 岡本通男氏
- うす1、タネリヨリ機、麦用千歯1、米用千歯1
以上4点 安部憲司氏

- 唐箕1、足踏み脱穀機1、わら切り1、田の草取り
1、杵1、ガンズメ2 以上7点 岩本幸村氏

- 燈心5点 金富善久氏
- 唐箕1点 小野義澄氏

美工資料

- 豊後刀（脇差）1点 薬師寺保之氏
- 福寿銘鏡1点 岡本通男氏

寄託

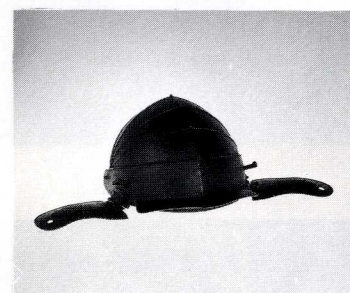
歴史資料

- 豊後各藩の藩札9点 山田芳久氏
- 岡藩銀札1、府内藩札2、杵築藩銀札1、佐伯藩銀
札1、日出藩銀札1、森藩米預かり切手1、臼杵藩
米預かり切手1、島原藩領豊後高田銀札1

- 嘉永井路絵図1巻 大分市下宗方区

美工資料

- 南蛮兜1、南蛮鍔3（ぶどう唐草十字文、山岳にク
ルス文、竜文にアルファベット記号）
以上4点 山田芳久氏



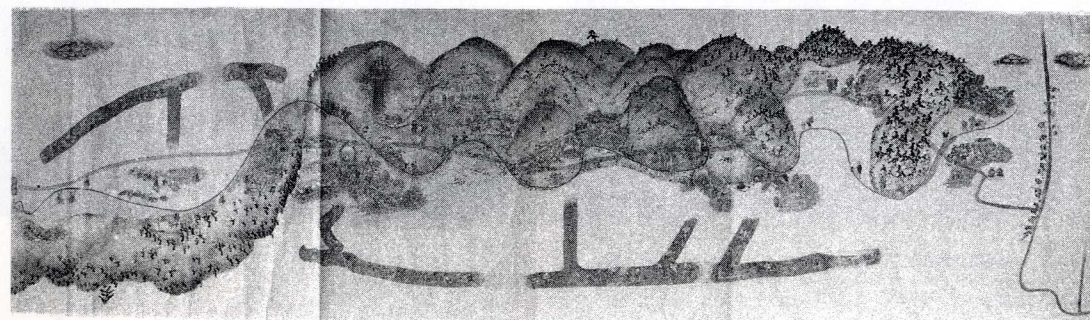
南蛮兜



南蛮つば



石の七厘



嘉永井路絵図

購入

歴史資料

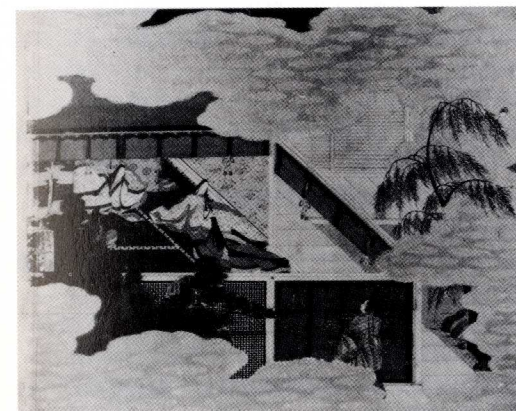
- 年未詳8月10日 府内藩主大給近訓書状 1通

江戸に滞在中の近訓が国元の家老津久井氏に宛てた書状で、内容は資金の月送りが滞り、日々の生活に支障をきたしているため、江戸で借財をすることに同意を求めたものである。近訓は第8代藩主で、文化4年（1804）叔父近義の跡を継ぎ、天保2年（1831）までその地位にあった。この間、府内藩では文政元年（1818）の銀札崩れを皮切りに藩札の信用不安、通用の停止を繰り返しており、本書状は藩財政窮乏の一面を物語る好史料と言える。 横125.3cm×縦15.3cm

美工資料

- 源氏物語絵 1面 「蜻蛉」 額装 紙本金地着色

本図は元来昨年度購入した20面と同じ屏風に描かれていた。夏のある日、光源氏の末息子薫大將が女性たちが蓋においた氷を割ろうと騒いでいるのを覗きみし奥に座る妻の姉女一の宮に心奪われてしまう場面を描く。さて、昨年度以来の調査で屏風仕立ての写真が発



源氏物語絵「蜻蛉」

見され、六曲一双で右隻第1扇から縦に第1帖から順に描かれていたことが判明し、本図は左隻第6扇の上から2番目にあたる。絵の上部には巻51「浮舟」から続く川の一部が見え、余すところなく切り離されている。屏風に復原することも可能と考えられ、今後残る帖の収集を続けたい。 横56.3cm×縦46.3cm

複製品製作

考古資料

- 宮崎県総合博物館蔵

（伝）大分市松岡京ヶ尾出土銅矛 1点

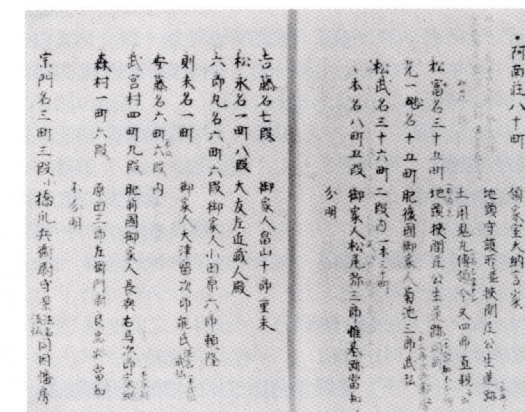
延岡藩主内藤家旧蔵によるもので、宝暦年間大分郡の成松村の郷民が掘り出したという。東京国立博物館にも2握所蔵されており、うち1握は開館時に複製品を製作している。

歴史資料

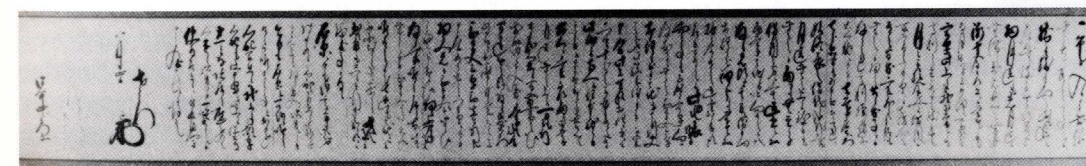
- 大分県立大分図書館蔵

豊後国図田帳注進案（碩田叢史本）部分

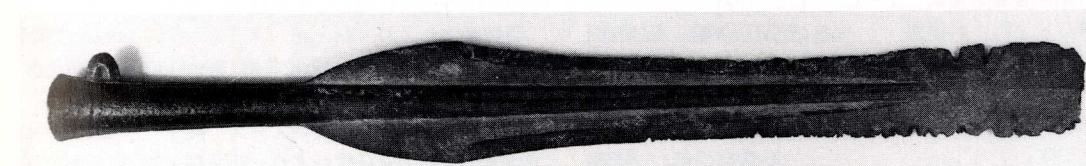
幕末の学者後藤碩田の考証によるもので、大分郡部分のみ製作した。



豊後国図田帳注進状案（複製）



府内藩主大給近訓書状



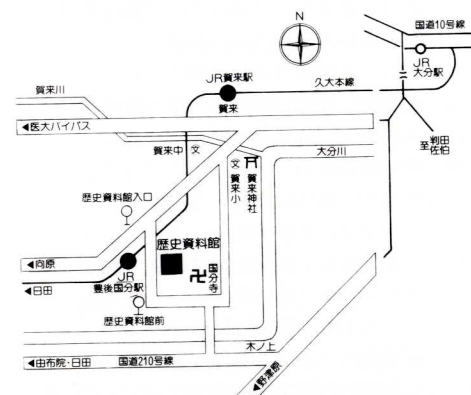
伝大分市松岡京ヶ尾出土銅矛（複製）

利 用 案 内

開館時間 午前9：00～午後5：00
 （入館は午後4：30まで）
 休 館 日 月曜日（祝日にあたるときは翌日）
 祝日の翌日
 年末年始（12月28日～1月4日）
 観 覧 料 大 人 200円（団体150円）
 小中高生 100円（団体 50円）
 （市内の小学生は無料です）

* 団体は30名以上
 * 特別展の開催中は別料金になる場合があります。

交通機関 JR久大線
 ○豊後国分駅下車
 大分バス
 ○歴史資料館前下車
 歴史資料館前ゆき（松ヶ丘経由）
 （木ノ上経由）
 ○歴史資料館入口下車
 国分新町ゆき
 向原ゆき（賀来経由）
 今畑ゆき（ ” ）
 中村ゆき（ ” ）
 竜原ゆき（ ” ）



大分市歴史資料館年報

1990

発 行 日 平成2年10月1日

編集・発行 大分市歴史資料館

大分市大字国分960番地の1

〒870 (0975) 49-0880